

明治、大正、昭和前期の日本における バスケットボールとジェンダリング

川島 浩平 (早稲田大学)

はじめに

スポーツは、規則に基づいて行われる身体的実践という性質を有する。こうした規則や実践は、「元来「男性向き」・「男らしい」や「女性向き」・「女らしい」といったジェンダー的性質を宿していることはない。しかしスポーツは、男らしさ女らしさと結びつけられて頻繁に語られ、記述されてきた。

たとえば野球、サッカー、ラグビーなどは、近年女性競技者が増加しているとはいえ、長年「男性向き」とされるスポーツの代名詞的存在であった。他方アーティスティックスイミング、新体操、薙刀などは、「女性向き」とされるスポーツあるいは武道の代表格である。

歴史を振り返ると、「女性向き」遊戯が「男性向き」競技へと劇的な変換を遂げたスポーツもある。これまでの研究はバスケットボールが、その日本への導入期において、女性と

子供の遊戯から一人前の男性の競技へと発展を遂げたことを明らかにしてきた。ここでは、本来性別のないはずのスポーツに「性差」が付与され、与えられた性差が転換するような現象、すなわち「ジェンダリング」⁽¹⁾が発生していたことを認めることができる。本論は、この時代にバスケットボールに何が起きていたのかを文献資料で裏付けた上で、バスケットボールからより多くの競技へと視野を広げながら、近代日本スポーツの歴史をジェンダリングの視点から読み直すために必要な方法を論じることを目的とする。

1. バスケットボールの黎明期における主要紙の報道

日本の主要日刊紙二紙『朝日新聞』と『読売新聞』は、明治時代初期からの報道情報を集積し、その成果をそれぞれデータベース『聞蔵Ⅱビジュアル(以下聞蔵)』と『ヨミダス歴史

館（以下ヨミダス）』として一般の利用に供してきた⁽²⁾。これら二つの検索エンジンを使って、日本で人気のある米国起源の近代スポーツの一つであるバスケットボールに関する、伝来と普及の開始期、すなわちこの競技の黎明期における報道の対象と内容を探るなら、この競技をしていた人々のジェンダーに関する興味深い事実を掘り起こすことになる。

(二) 朝日新聞の場合

まず聞蔵をキーワード「バスケットボール」または「籠球」⁽³⁾で検索すると、いずれのキーワードでも同じ記事をヒットすることがわかる。これらの記事を最も古いものから順に一覧化したものが表1である。

最古の記事は、一九〇六年（明治三十九年）五月二九日掲載の「高千穂小学校春季運動会」で、表上での最新は一九一七年（大正六年）五月二三日掲載の第三回極東選手権競技大会（以下極東選手権）に関する報道記事である。両者の間には一二年間の歳月の隔たりがある。日本史概説を紐解くなら、この期間が明治末期の保守反動時代から大正デモクラシーの興隆期にあたることがわかる。その内容は、前半六記事と後半七記事で大きく特徴を異にする。前半六記事は一九〇六年から一九一五年までの一〇年間に分散し、その見出しは「運動会」から「勸業博覧会」や「女の運動」など様々である。その内容も、各種運動会の案内からプログラムの解説、博覧

会展示の説明、当時の女性の運動（スポーツ）参加に関する社説など多様である。他方後半七記事は一日間に集中し、そのすべては、一九一七年五月八日から一二日まで東京で開催された第三回極東選手権に関連し、見出しと内容も、予選成績、競技日割、競技記録、振り返りなど同大会に関するもので、その単調さが際立っている。

表1

| 日付 | 見出し | 内容 | 対象のジェンダー |
|-----------------|---------------|--------------------------|----------|
| 1906(M39)/5/29 | 高千穂小学校春季運動会 | 運動会プログラム紹介 | 女(児) |
| 1907(M40)/3/28 | 東京勸業博覧会 | バスケットボールを遊ぶ会員 | 女(子部会員) |
| 1907(M40)/12/3 | 日本女子大学運動会 | 運動会プログラム紹介 | 女(学生) |
| 1909(M42)/11/15 | 麻中小学校運動会 | 運動会プログラム紹介 | 男女(児) |
| 1911(M44)/5/10 | 宇都宮高等女学校春季運動会 | 運動会プログラム紹介 | 女(子高校生) |
| 1915(T4)/4/18 | 女の運動「玉遊び」 | 男学生の運動の季節に女学生の運動はどうであろうか | 女(学生) |
| 1917(T6)/5/3 | 第3回極東選手権大会 | 大会開催前報道 | 男性(選手) |
| 1917(T6)/5/4 | 第3回極東選手権大会 | 大会開催前報道 | 男性(選手) |
| 1917(T6)/5/10 | 第3回極東選手権大会 | 大会開催中報道 | 男性(選手) |
| 1917(T6)/5/11 | 第3回極東選手権大会 | 大会開催中報道 | 男子(選手) |
| 1917(T6)/5/13 | 第3回極東選手権大会 | 大会開催後報道 | 男子(選手) |
| 1917(T6)/5/13 | 第3回極東選手権大会 | 大会開催後報道 | 男子(選手) |
| 1917(T6)/5/13 | 第3回極東選手権大会 | 大会開催後報道 | 男子(選手) |

キーワード「バスケットボール／籠球」によりヒットする記事、最古から一三件（『聞蔵』）

報道の対象である競技をする人々のジェンダーもまた、対照的である。前半六記事は、男女児を対象とする一九〇九年一月一日掲載「可愛い運動会 麻布の麻中小学」を例外として、すべては女性である。ただし残る五記事は、女兒（高千穂小）から、高等女学校生（宇都宮女子）、女子大学生（日本女子）まで、幼きから成人までの幅広い年齢層を捉えている。これに対し後半七記事すべては、極東選手権が男性のみに開かれた大会であったことから、男子選手を対象とし、そのほとんどが大学や専門学校等に在籍する成人だった。後半七記事は年齢層の点でも単調なのである^④。

（二）読売新聞の場合

次にヨミダスを、同じキーワードで検索し、最も古いものから順に一覧化したものが表2である。

最古の記事は、一九〇七年（明治四〇年）四月二三日掲載の「今の女子学生の体育」で、表上での最新は一九一八年（大正七年）四月二一日掲載の東京基督教青年会（Young Men's Christian Association、以下YMCA）の勝利に関する報道である。両者の隔たりは、聞蔵と同様に一二年間に及んでいる。ヨミダスがヒットした記事の内容も、前半と後半で特徴が大きく異なる点で、聞蔵による検索結果と類似している。前半六記事は一九〇七年から一九一七年までの一年間に分散し、その見出しには、大学運動会三件に加えて、「今

表2

| 日付 | 見出し | 内容 | 対象のジェンダー |
|-----------------|------------|----------------|----------|
| 1907(M40)/4/23 | 今の女子学生の体育 | バスケットボールは如何、 | 女(学生) |
| 1907(M40)/9/19 | 高貴の体育 | 皇室バスケットボール買い上げ | 今上陛下(男性) |
| 1909(M42)/12/3 | 日本女子大学運動会 | 運動会プログラム紹介 | 女(学生) |
| 1910(M43)/10/31 | 日本女子大学校運動会 | 運動会プログラム紹介 | 女(学生) |
| 1915(T74)/6/6 | 日本女子大学校運動会 | 小学生運動会プログラム紹介 | 女(児) |
| 1917(T76)/4/28 | お嬢さん達の大元氣 | 第三高女(麻布)の運動会 | 女(子高校生) |
| 1917(T76)/5/2 | 第3回極東選手権大会 | 大会開催前報道 | 男性(選手) |
| 1917(T76)/5/11 | 第3回極東選手権大会 | 大会開催中報道 | 男性(選手) |
| 1917(T76)/5/27 | 第3回極東選手権大会 | 大会開催後報道 | 男性(選手) |
| 1918(T77)/2/1 | 運動界 | 外国人バスケットボール競技 | 男子(選手) |
| 1918(T77)/2/14 | 運動界 | 外国人同志のバスケットボール | 男子(選手) |
| 1918(T77)/4/21 | 運動界 | 東京基督教青年会勝つ | 男子(選手) |

キーワード「バスケットボール／籠球」によりヒットする記事、最古から一二件（読売新聞社 ヨミダス歴史館）

の女子学生の体育」「高貴の体育」「お嬢さん達の大元氣」などが混在する。その内容は、運動会関連の他は、皇室と運動やスポーツの関わり、そして当時の女性のスポーツ事情などである。これに対し後半六記事は、第三回極東選手権に関する事前、大会中、事後報道三例に加えて、「運動界」^⑤と題する三例である。後半六記事は、聞蔵の検索結果よりもや

や長い期間に渡って掲載され、その内容には新しい情報加わる。つまり第三回極東選手権後に開催されたYMCAが主催した試合の、外国人チーム間あるいは日本人チーム間の試合内容と結果に関する報道である⁶⁾。

報道が対象とする競技をする人々のジェンダーの点でも、聞蔵との類似は明らかである。前半六記事はすべて、皇室関連のものを例外として、女性を取り上げている。しかし後半六記事はすべて、男性に関するものである。前半六記事は、女児、女子高校生、そして女子学生まで幅広い年齢層を対象としているが、後半六記事はいずれも、成人男子のみを対象とする。

(三) 紙面での「男性化(マスキュリナイゼーション)」

聞蔵とヨミダスのデジタルデータは、日本バスケットボール界の黎明期に一つの興味深い現象が起きていたことを明らかに出す。すなわちそれは、第三回極東選手権の年一九一七年(大正六年)を境に、バスケットボールをする人々が、あるいはバスケットボールをする人々として表象された人々が、女性から男性へと転換したということである。報道記事は、この年以前の10〜11年間、小学生や皇室関係者を例外に、バスケットボールをする人々を女性として記述し、表現していた。その年齢層は女児から成人までに及んだ。しかしこの年以降は、例外なく男性として記述し、表現した。そして年齢層も成人に限られていたのである。

そうであるなら、すくなくとも新聞紙面では、バスケットボールをする人々が女性から男性へと変化したといえるだろう。換言するなら、日本にバスケットボールが導入され、受容されてから10年以上もの期間、メディアはバスケットボールを「女性の」あるいは「女性がする」競技として表象していたが、それ以後になると、「男性の」、「男性がする」あるいは「男性もする」競技として表象するに至ったということになる。このような言説空間にみられた変化の背後では、実際に何が起きていたのだろうか。

近代スポーツの日本への導入に関する研究業績は多い。むしろスポーツ史研究者は、上述のような「女性がする」あるいは「男性がする」スポーツとしてのバスケットボールに注意を向けてこなかったわけではない。後述のように、黎明期のバスケットボール史には、いくつもの重要な研究がある。しかしこれまでの研究は、「女性がする」あるいは「男性がする」スポーツを別に扱い、二つの異なる解釈の枠組みと動向を生み出してきた。本論のように女性から男性へという、バスケットボールをする人々のジェンダーの転換という視点に立つ研究は極めて少ないといえる。しかしここには、いくつかの興味深い課題を設定し得る。すなわち、一つには、「女性がする」競技を男性がすることに對して、反対や抵抗はなかったのか、である。当時は、現在からは想像することも困難なほど、男性と女性の意識や行動を制限し、拘束する厳格な規範が存在した時代であったのだ。さらなる課題は、

反対や抵抗があったとするなら、それはどのような形態をとったのかであり、男性たちが「女性がする」競技を選ぶ際に、ジェンダー役割を規定する厳格な規範にいかに対峙し、あるいは挑んだのかである。本論は、これらの課題一つひとつに取り組んでゆく。

Ⅱ. バスケットボールの普及と起点論争

(一) 成瀬仁蔵と井口阿くり

幕末の争乱と明治維新を経て、近代国家建設への道を歩み始めた日本の明治政府は、西洋の知識と技術、思想と価値観などを自国文化の文脈に適合させるために取捨選択して取り入れつつ、やがて、知的、精神的側面だけでなく、身体的側面でも、欧米人に劣らない強さを身につけることが、国際社会で対等の地位を得るための必須の条件であることを痛感するに至った。軍事力、兵力に反映される男性の身体力は、一八九〇年代、一九〇〇年代に勃発した日清・日露の二つの戦争での勝利によって、一定の達成感を味わうことができなかつたかもしれない。しかし人口の半分を成す女性は、当時なお旧弊に縛られ、男尊女卑の因習の下で、西洋文明の恩恵を受けるのが難しい地位に貶められていた。一九世紀末になると、日本の指導者は、女性の身体力強化と健康増進を焦眉の急とみなすようになったのである⁽⁷⁾。同じ頃、米国で考案された新しい近代スポーツ競技のバスケットボールと、日本

女性との邂逅は、このような文脈に位置づけることができる⁽⁸⁾。

両者の遭遇において先鞭をつけた代表的人物の一人が成瀬仁蔵である。成瀬は一八五八年、倒幕勢力の拠点の一つ長州に生まれた。青年期にキリスト教に傾倒し、二十歳で梅花女学校での教職に就いた。その後、女性教育を生涯の使命とする自覚に至り、一八九〇年一月二月、米国留学のために横浜を出港する。一八九二年一月には、バスケットボール生誕の地である、マサチューセッツ州スプリングフィールドのYMCA国際訓練学校を訪ねている。バスケットボール誕生後、わずか一年しか経過していない時期だった。成瀬はここでルーサー・ギューリックに面会する。ギューリックは、ジェームズ・ネイスミスに命じて、このゲームの誕生を導いた、米国体育界の代表的指導者であった。成瀬は一八九四年一月に帰国し、三月に古巣の梅花女学校に校長として着任する。そして留学期間に得た経験と知識を、著書『女子教育』にまとめ、九六年に発表した。成瀬は本書で、女子大学設立の意義を世に問い、そのなかでバスケットボールを「球籠遊戯」として紹介するのである⁽⁹⁾。

「球籠遊戯」とは、ネイスミスが考案し、センダ・ペレンソンが女性向けに修正を加えたゲームをもとに、成瀬が日本の女性向けにさらなる修正を施した成果であった。ここに日本のバスケットボールは産声を上げたといえる。このことは、研究者の評価によって裏付けることができる。たとえば野田と

上村は、梅花女学校『創立六〇年史』の記述にもとづく検証作業を通して成瀬の実践に「日本における初めての女子バスケットボールの試み」との評価を与えている。また谷釜らは『バスケットボール競技史研究概論』で、成瀬に「日本におけるバスケットボール競技的な競技」の紹介者との地位を与えている。その後成瀬のゲームは、一九〇一年に創立された日本女子大学校で体育カリキュラムに導入される一方、毎年開催される運動会等で定期的に行われるようになった¹⁰⁾。

成瀬から少し遅れて、日本バスケットボールの草創期に、その普及に貢献した人物の一人に「日本女子体育の母」と呼ばれる井口阿くりがいる。井口は一八七〇年に秋田に生まれ、高等師範学校女子部に学び、同校附属高等女学校助教諭、私立毛利高等女学校教頭を経て、一八九一年スミス大学での留学のために米国に渡った。スミス大学では体育部長の要職にあったセンダ・ベレンソンの指導を受け、一九〇三年に帰国して女子高等師範学校教授に着任し、バスケットボールの指導に励んだ。その様子を、当時の報道はこう記述している。「女子高等師範学校の体操教師井口あくり女史は同校の女学生に対し熱心に此技「バスケットボール」を競はしめて居るが聞けば同女史は非常なる否テニス派で盛んにテニスの弊害を並べて居て国語体操科の生徒などには断然テニスをする事を禁じ遊戯としては唯一つこのバスケットボールのみを許して居る。」¹¹⁾

ここにはテニスへの言及もある。テニスはバスケットボ

ル伝来よりもかなり早くから日本の中流階級、とくに女性の間で人気の競技になっていた¹²⁾。自分の学生たちに、そのテニスを禁じ、バスケットボールのみ許可しているという点に、井口のバスケットボールに対する思い入れが窺える。女子高等師範学校という教師養成機関の教授であった井口の役割は重要である。彼女の薫陶を受けた卒業生たちは全国に散らばり、各地の高等女学校で指導にあたり、バスケットボールは授業や運動会などで実践されることになった。こうしてバスケットボールは、児童、女子中高生、女子大生の実践として徐々に、しかし着実に普及し始めたのである¹³⁾。

聞蔵、ヨミダスのデータの前半の記事は、こうした概況から切り取られた断片として読むべきである。「女性がする」ゲームとして表象されていた時代の現実とは、以上のようなものであった。

(二) YMCAと大森兵蔵、宮田守衛、F・H・ブラウン、佐藤金一、

日本における近代スポーツとしてのバスケットボールの源流として、最初に研究者の認知を得たのは、一八四四年に英国ロンドンで創立されたYMCAである。その後YMCAは、一八五一年にボストンに米国最初の拠点を築き、一八八〇年に東京で発会式を挙行している。YMCAは、その一八〇年に届こうとする長い歴史を通じて、キリスト教主義に立った徳育、知育、体育の三者を包摂する、バランスの

とれた全人的教育の理念を掲げ、その実践に努めてきた。その後明治時代に、大阪（一八八二年）、横浜（一八八四年）、京都（一八八九年）、神戸（一八九九年）、名古屋（一九〇二年）、長崎（一九〇五年）など、主要都市で開設し、その活動のすそ野を広げた。しかし当初体育の指導は、積極的な関与の対象にされることなく、キリスト教伝道という中心的な使命の陰におかれた追隨的な活動にすぎなかった。しかし米国での福音派による体育実践を重視する「筋肉的キリスト教」運動は、YMCAを通じて一九世紀末から徐々に浸透し、近代スポーツの発展を支える主要な脈流の一つとなるのである。なお、横浜YMCA設立から三年後一八八七年には、米国マサチューセッツ州スプリングフィールドにYMCA国際訓練学校が創立された。ここがバスケットボール発祥の地となることは、すでにみたとおりである¹⁴。

日本でのバスケットボールが「男性が（も）する」スポーツとして導入され、本格的に発展するのは、YMCAで教育を受けた、主として四人の男性たちに依るところが大きい。その四人は成瀬からおよそ一代を経て、一八七六年から一八八五年までの一〇年間に生まれた日本人三名と米国人一名からなる。それは、大森兵蔵（一八七六―一九一三）、宮田守衛（一八八〇―一九六四）、フランクリン・H・ブラウン（一八八二―一九七三）、そして佐藤金一（一八八五―一九四九）の四名である。彼らはそれぞれ岡山県、大分県、ニューヨーク州、愛知県に生まれ、その生い立ち様々であ

る。しかし、いずれもYMCAに所属し、人気急騰の途にあった米国で草創期のバスケットボールを学んだ点で経験を共有する。四人がそれぞれ、日本の赴任先でバスケットボールの指導に関わることになるのは、米国での経験の延長上のごく自然な成り行きであった¹⁵。

四人が青年期にバスケットボールに出逢い、若い情熱を注ぎ始めたころ、日本のYMCA（一九〇三年以降日本YMCA同盟¹⁶）の活動は、いくつかの都市で軌道に乗ろうとしていた。バスケットボールは、一八九〇年代の米国ではすでに中等、高等教育で男女双方が楽しめる人気競技となり注目を集めていたが、日本のYMCAでは、男性のみに参加が許された活動であったことは注意に値する。YMCAの女性版ともいえるYWCA (Young Women's Christian Association) が一八五五年にロンドンで創設され、その波は一九〇五年に日本に及び、津田梅子を初代会長としてその歩みを始めた。しかしYWCAは、都市部の未婚女性の福利厚生の実を目的に掲げていたが、当時「男性的」とみなされた近代スポーツを受け入れようとはしなかった¹⁷。日本YMCA同盟もまた、第二次世界大戦後まで女性を会員として受け入れることはなかった。例えばその方針は、東京YMCAで、一九一七年に竣工した体育館に設置された温水プールを「禪ヲ使用セザルヲ原則トス」との規則で縛って男の領域としたことにも窺える¹⁸。米国では男女のスポーツとして広く普及し始めていた時代に、日本YMCA同盟におけるバスケットボールは、

男の世界だった。そこでは、成瀬や井口らが指導した球技とは異なる「男性がする」スポーツが展開していたのである。

これら四人の生き様をたどるなら、日本YMCA同盟におけるバスケットボールが、一九〇〇年代後半から一九一七年のクライマックスへと至る道筋が見えてくる。まず大森が、一九〇八年に米国留学から帰国し、東京YMCAでバスケットボールやバレーボールを紹介した。彼は一九一二年のストックホルム五輪で、重い肺病を押して日本選手団の監督という大役を務めるが、翌年、カリフォルニアで客死する。

一九一二年、日本YMCA同盟が、第四回総会で体育事業の振興を決議し、本場から体育教育の専門家を求めたことを受け、白羽の矢を立てられたのがブラウンだった。ブラウンは、一九一三年一〇月に日本YMCA同盟体育主事として来日する。彼が監督すべきは、地域を限定されず日本全国とされたが、とくに設備の整っていた関西地区を中心に、まず指導にあたることになった。一方京都では一九〇九年に帰国した佐藤が京都YMCAで、神戸では一九一一年に帰国した宮田がその総主事となって神戸YMCAで、それぞれバスケットボールの指導にあたった。東京YMCAは一九一七年まで環境が整わず、関西に後れを取るようになった。宮田、佐藤ら帰国組は、ブラウンのサポートを得て、それぞれの土地で男子バスケットボールチームを育てあげた。一九一六年五月、第三回極東選手権予選で佐藤の京都チームが宮田の神戸チームを下し、出場権を獲得する。先の聞蔵とヨミダスの

データの後半で焦点となった日本代表チームこそ、佐藤率いる京都YMCAチームそのものにほかならない。第三回極東選手権大会は、佐藤とその仲間にとって晴れの舞台だったのである。

日本代表チームは、第三回極東選手権でフィリピン、中国に惨敗した。翌一九一八年になると東京YMCAチームは、新設備の整った体育館竣工という順風を受け、関西から移動してきたブラウンの本格的指導の下で、極東選手権に出場した京都YMCAチームに五九対三二で大勝し、日本バスケットボール界の覇権を手中にした。既出ヨミダスの四月二一日の記事は、この象徴的な一戦を記録したものである⁽¹⁹⁾。

第三回極東選手権は、結果こそ振るわなかったが、バスケットボール界でその後続くYMCA時代の幕開けを告げるものでもあった。一九二〇年代には、極東選手権が定期的で開催され、全日本選手権大会（一九二一年）、明治神宮大会（一九二四年）等の開催が続き、やがては一九三六年ベルリン五輪でのバスケットボール正式種目化へと至る。かくしてバスケットボールは、全国、国際レベルでの大規模な大会を舞台として国民の注目を集めるようになるのである。女性もまた、女子選手権大会の開催や明治神宮大会への参加（一九二四年）など、また中等・高等教育での体育あるいは部活を通じて、競技人口を増加させていった⁽²⁰⁾。

そうであるなら、聞蔵とヨミダスのデータ後半にみられた紙面での「男性化」という現象は、その後に続く時代の動向をい

かに、どの程度予兆するものだったといえるのだろうか。

(三) 「遊戯」時代の起点論争

これまでみてきたように、日本近代におけるバスケットボールの黎明は、成瀬や井口らによる女子・女性向け遊戯としての導入と、大森、ブラウン、佐藤、宮田らによるYMC A活動の一環としての実践という、大きく二つの潮流によって特徴づけられるものだった。過去年半世紀、バスケットボール史研究者が取り組んできた課題の一つは、このような系譜を解明するに及んで、現代までつながる近代スポーツとしてのバスケットボール競技の源流としての地位を、二つの潮流のいずれに与えるかである。

結論を先取りするなら、記録や資料が明記され、閲覧を求められやすい権威性を帯びた文献での支持を受けたことも手伝い、まず大森が始まるYMC Aの流れに日本バスケットボール史の起点を見出す立場や解釈が先行し、やがて研究の深化とともに、先駆者と見なされていた人々以前の人々による活動とその足跡が掘り起こされるに及んで、女子・女性向け遊戯としての導入者たちの貢献が評価されるようになったといえる。前者の系譜に、一九三六年出版の『大日本體育協會史』（以下『協會史』）、一九八一年出版の『バスケットボールの歩み 日本バスケットボール協会五〇年史』（以下『バスケットボールの歩み』）、そして『バスケットボールの歩み』の執筆を担当した研究者らによる業績がある⁽²¹⁾。

また後者の系譜に、成瀬に始まる女子教育の指導者たちの活動を検証した一連の業績を指摘することができる⁽²²⁾。さらに、二つの流れを俯瞰し、総合的な検討を加えた最新の、第三の流れがある。第三の流れを汲む代表的研究は、前出の谷釜らによる『バスケットボール競技史研究概論』である⁽²³⁾。

谷釜はまず、第一の流れを受けて「Nagamiが考案したバスケットボール競技を日本にはじめて伝えたのは大森兵蔵だと伝えられている」との評価を下す。次に第二の流れを視野に捉えて「日本におけるバスケットボール競技的な競技の移入は、女子の体育教材として早々に行われている」と記述し、その上で「日本で最初の女子バスケットボール競技の紹介者は成瀬仁蔵である」と論じている⁽²⁴⁾。ここには、YMC Aの流れを「バスケットボール競技」、成瀬の流れを「バスケットボール競技的な競技」と呼んで差異化しながら、「バスケットボール競技の受容史・普及史」という枠組みに、共存させながら位置づけようとする工夫が認められる。

「バスケットボール競技」と「バスケットボール競技的な競技」との区別は、史学史研究の立場からの一つの整理のありかたとして有効であるとしても、明治から大正にかけての時代を生きた当時の人々が、球と籠でおこなうこの競技の多様性とその変容を、どのように体験し、見聞し、そして認知したのかは、別の問題である。この点を、近代日本スポーツ史研究の権威岸野雄三の解釈枠組を援用しながら、改めて確認しておきたい。

岸野は、明治一〇年代、つまり一八七〇年代後半以降から一九二〇年代まで、すなわちこれまで見てきた日本バスケットボール界の黎明期をすべて包含する時代の、日本における学校体育のありかたを、次の四つのカテゴリを用いて解説する⁽²⁵⁾。これらのカテゴリは、同時に、当時流入しつつあった近代スポーツを位置付ける枠組みでもある。その四つとは、体操伝習所系譜の普通体操、陸軍戸山学校系譜の兵式体操、武道、そして外来スポーツである。これらは、明治維新を経て文明開化期にあった日本の学校体育が、教材として利用しうる知識と実践の源を示すものでもあった。その後、教育界では一九世紀末になると遊戯を重視する運動が興隆し、第四の外来スポーツと統合されてゆく。その結果、学校体育では大正二年（一九一三年）の学校体操教授要目においてなお、外来スポーツを包摂する概念として使われた「競技」は、「遊戯」の下位区分に置かれていた。次の大正一五年（一九二六年）の学校体操教授要目により初めて、競技は遊戯から独立した地位を得ることになるのである。このとき、「遊戯」は競争遊戯、唱歌遊戯、行進遊戯の三者、「競技」は走技跳技及投技、球技の二者からなるとされた⁽²⁶⁾。

時代をバスケットボールの黎明期、一八九〇年代以降にもどそう。遊戯を重視する運動が興隆したこの時代に、「遊戯」という概念は、児童向けの手遊びから成人向けの近代スポーツ、つまり英国や米国で発祥した運動競技全般をも含むこむに至る。教育界、学界での認識がかくあったのなら、一

般人の理解は推して知るべし、である。そのなかで、遊戯の一つとみなされたバスケットボールとは何かについての、つまりその定義をめぐる体育関係者の理解もまた混沌としていた。当時を代表する体育・遊戯研究者の一人で、一九〇四年に『籠球競技』を著した高橋忠次郎の言葉を借りるなら、「従来バスケット、ボールなる語は遊戯界に用ひらるれども其演技法に至りては各所共一定せず蓋し籠と球とを用ふれば其組織の如何を問はず直ちにバスケット、ボールと称するもの如し」という状況であった⁽²⁷⁾。つまり、籠と球を使う遊戯にはいくつもの異なる種類があったが、人々はそれらすべてを「バスケット、ボール」という言葉で把握し、種類の差異には無頓着であったということである。このような状況下では、成瀬が構想した「バスケットボール競技的な競技」も、大森が教えることになる「バスケットボール競技」も、「バスケット、ボール」として実践され、観戦され、あるいは言及されていたにちがいない⁽²⁸⁾。

当時「バスケット、ボール」は、まず女性と子供がする遊戯だった。そして、一〇年ほどが経過して、男性もそれをするようになった。このことの意味を考えなければならぬ。

一九〇〇年代後半とは、「硬教育」思想の下、風紀上の理由で女学校運動会への男子入場が禁止され、小松原英太郎文部大臣は新聞や雑誌で女学校に最も適した体操は薙刀体操であると主張する、そんな時代だった⁽²⁹⁾。男性と女性異なる領域で、異なる価値や規範の下に思考し、行動することが求め

られていたのである。当時の社会で女子や子供の遊戯とされた「バスケット、ボール」に手を染める成人男子は、厳しい世間の目や批判を覚悟しなければならなかったことだろう。

こうして焦点は、第一部のおわりで述べた点に戻ってくることになる。当時の男性バスケットボール選手たちは、いかなる反対や抵抗に直面し、これにどう挑んだのか。それを明らかにすることが次節以降の課題である。

Ⅲ. 『日本バスケットボール協会五〇年史』座談会

(一) 大日本籠球協会創立へ

第三回極東選手権は、YMCA活動の一環としてのバスケットボールが、日本を代表して国際社会にデビューを果たした最初の機会であった。そしてそれは、子どもや女性の遊戯とされていた一つの球技が、成人男性が真剣に取り組む運動競技として、国民に展示された契機でもあった。以来、国際社会において帝国主義国家がアジアやアフリカでの覇権をめぐって競争を激化させた時世にあって、極東選手権もまた、フィリピンや中国に対し、アジアの盟主としての自負を強化させる一途にあった日本が、スポーツ界での覇権国家であることを顕示する格好の舞台となった。それゆえ、一般人やメディアの注目を加速的に集めることになってゆく。ここで重要なのは、極東選手権でのバスケットボールの試合が、最終となる第一〇回大会まで、女子選手不在の、男性選手の

みに与えられた機会だったことである。ここでバスケットボールは、「男性がする」競技として表象され、語られることになる³⁰⁾。

YMCAの活動が、戦前において、広く日本国民の男性を対象として精神、知性、身体 of 三者を錬磨するために実践されたことは先に述べたとおりである。とりわけバスケットボールは、身体を鍛えるための体育活動として人気を博していた。

一九二三年には、同年五月に大阪で開催された極東選手権が刺戟となつて、東京YMCAでも多くの試合がおこなわれた。第一回のバスケットボール大会も開催されている³¹⁾。

しかし体育活動は経費負担も大きかった。一九二二年の経常収支会計報告書は、体育部収入一六五六円九六銭に対し体育部費支出が一四八〇六円五七銭と嵩み、三一四九円六一銭（現在の価値で五一四万円）の赤字を計上している³²⁾。また同年、体育館に登録された会員八三九名のうち、キリスト教会に属する正会員は四九名、キリスト教会に属さない準会員は七九〇名であった³³⁾。体育登録会員の九四%以上がキリスト教会に属さなかったことになる。この状況が、キリスト教精神の涵養を重視する会員にとつて、好ましからざる事態であったことは容易に想像できる。

こうした、組織内に分裂を引き起こしかねない状況は、すでに一代も前に米国で発生していた。バスケットボール人氣が過熱し、暴力沙汰が頻発する事態に直面すると、一八九七年にはニュージャージー州のキャムデンYMCAの

ように、この競技を体育館から締め出す決定を下すところも現れた。やがてプロ化が進行する一方、アマチュアの試合はアマチュア・アスレチック・ユニオン(AAU)の統括下に入つてゆく。ギユリック、ネイスミス、そしてベレンソンらが育んだ米国生まれのゲームは、次第にその揺籃の団体から疎遠になつていった⁽³⁴⁾。一方日本YMCA同盟は、少なくとも一九二〇年代前半までは、体育事業への積極的な関与を継続した。バスケットボールでも、当面は覇権を守り続けた。しかし一九二〇年代後半になると、大学生という新興勢力によって脅かされることになるのである。

日本バスケットボール界パイオニアの一人小林豊は、少年期にこの球技に夢中になり、一九一七年に竣工した神田美土代町の屋内総合体育館に足しげく通つた一人である。小林は、後に詳しくみることになる座談会で「当時「一九一八年ごろ」、正式なバスケットボールをやつていたのは、日本ではYMCAだけでした。東京でも大学チームはまだ一つもありませんでした」と語っている⁽³⁵⁾。小林のようなYMCA訓練組は、やがて中等教育を経て大学へと進学し、それぞれの母校で同好会や正規の運動部を創設してゆくことになる。

大学競技としてのバスケットボールの道を切り拓いたのは、聖公会を通じて米国との絆が特に強く、異文化の導入に積極的だった立教大学である⁽³⁶⁾。立教大学は、一九二一年(大正一〇年)に日本の大学で初のバスケットボール部を創設する。その二年後には、早稲田大学と東京商科大学

が、さらに中央大学(一九二五年)、明治大学と東京帝国大学(一九二六年)、慶応義塾大学(一九二八年)、東京農業大学(一九二九年)が続いた。関東勢で先陣を切つた立教、早稲田、東京商科の三大学は、一九二四年に発足した全国学生バスケットボール連合の決定に従い、同年に三大学による第一回リーグ戦を開催する。以後、新しく創設された大学のチームを漸次的に受け入れ、一九三〇年の第七回大会までに八大学によるリーグ戦へと発展させた。第一回から第七回までの七大会での優勝は、立教が六回、早稲田が二回、東京商科が一回(一九二七年は三大学同率優勝)で、これら老舗三大学が覇権争いを繰り広げたことがわかる⁽³⁷⁾。

多くの大学選手たちは、現役を終えてOBになつてからも、バスケットボールの発展に献身した。そして次第に、競技者としてだけでなく、日本における競技の統括権をかって、先駆者のYMCAと鎬を削ることになってゆく。しかし、すでに見たように、内紛の種を抱えながら精神的、知的、身体的な錬磨を目標とする多種多様な活動の一つとしてバスケットボールに関与したYMCAと、部活動に専心できた大学関係者との攻防の行方は明らかだった。

両者の力関係の変化は、日本一を決める大会として一九二二年から始まった全日本選手権大会の結果からも推し量ることができる。YMCAは、第一回(一九二二年)から第五回(一九二五年)までの大会を四度制覇し、一九二四年に立教の優勝を許したのみであった。しかし第六回

(一九二六年)以降になると、王座を大学チームに譲り、再び返り咲くことはなかった。第六回から第一〇回(一九三一年)で優勝したのは、早稲田が二回(一九二六年、二八年)、東京商科が二回(一九二七年、二九年)、そして成蹊が一回(一九三一年)である⁽³⁸⁾。

YMCAに対する批判が高まった一因は、第三回大会以降、極東選手権で惨めな敗北を続けたことにもあるとされる。惨敗を喫した第三回大会以後、不参加に終わった第四回を経て、上海で開催された第八回大会(一九二七年)まで、日本代表チームは定位置の最下位から浮上できなかった。米国の政治的、文化的影響を強く受けていたフィリピンが、中国が優勝した第五回大会を除いて首位を独占した。大学バスケットボール関係者は、YMCA主導下の体制では国際競争力をつけられないとの危機感を募らせ、行動を起こした⁽³⁹⁾。その成果の一端は、一九三〇年の大日本籠球協会の設立として実現した。同協会の初代理事はみな、一九二〇年代に現役選手として大学バスケットボール界を牽引した三〇歳に満たない若者だった。彼らは、一九三〇年に開催された第九回極東選手権でナショナルチームを二位に押し上げた。さらに国際社会でのプレゼンスを高める努力を続け、一九三六年のベルリン五輪でバスケットボールが正式競技に採用されると、代表チームを送り出した。代表チームは、中国、ポーランドを破る健闘を見せ、第九位の記録を残したのである。こうして一九一〇年代後半から三〇年代を通して、日本バ

スケルトン界は、その後の発展につながる軌道を整備することに成功した。そして、極東選手権と近代五輪大会という国際的舞台で、マスメディアの関心の焦点には常に男性がいた。すくなくとも国際的報道では、バスケットボールは「男性がする」競技として描かれることになったのである。

もちろん、当時のバスケットボール界は男性だけの領域だったわけではない。成瀬や井口ら先駆者の教え子たちが指導した選手が全国各地で成長していた。一九二四年、大日本体育同志会主催で第一回女子選手権大会が開催され、二二チームが参加し、竹早高等女子Aが優勝した⁽⁴⁰⁾。女性選手は同年、内務省の監督下に開催された第一回明治神宮競技大会にも出場している。この大会では新潟から当時無名だった新津高等女子が参加し、優勝候補とみなされていた竹早高等女子を決勝で破り脚光を浴びた⁽⁴¹⁾。一九三一年には前年に設立された大日本籠球協会の主催で第一回全日本女子バスケットボール選手権が開催され、愛知淑徳高等女子が優勝している。

後に見るように、全国的に競技人口をみるなら、女性が多数派を占めてもいた。また、大学での活動は関東主導であったとはいえ、関西地方でもバスケットボールの普及は加速していた。一九二四年になると第一回大阪市学童大会が開催され、一四校二二チームが出場した。同年、関西バスケットボール連盟主催で第一回選手権大会が開催され、大阪YMCAが優勝している⁽⁴²⁾。都道府県協会としては、その多くの

設立は第二次世界大戦後を待たなければならなかったが、長崎県が最も古く一九二八年に設立され、一九二九年に愛知県が続いた⁽⁴³⁾。

それでもバスケットボールの歴史の主脈は、大日本籠球協会を支えた指導者たちの記憶のなかでは、YMCAによって導入され、関東地区の大学関係者に継承されるという図式で定着し、語り継がれることになった。その史像は一九八〇年に、戦後「日本籠球協会」として再発足した同組織が、五〇周年を祝う機会に出版した書籍『バスケットボールの歩み』に窺うことができる。このとき協会創立に貢献した理事たちの多くは、生涯をバスケットボールの普及と発展に捧げ、晩年を迎えていた。これらバイオニアの声に耳を傾けてみたい。

(二) 登場人物

上掲所『バスケットボールの歩み』掲載の一企画に「座談会協会設立以前のバスケットボール」がある。これは当時協会理事を務めていた法政大学教授、渡辺直吉司会の下、協会の功労者六人、富田毅郎（ぎろう）、小林豊、妹尾堅吉、植田義己、七海久、野村瞳が、協会設立以前のバスケットボール事情について懇談する内容になっている。懇談者のプロフィールは、彼らが若き頃からゲームに親しみ、生涯を通じてゲームにかかわり、協会を支え、ゲームの普及と発展に貢献してきたバスケットボール界の要人であることを物語る⁽⁴⁴⁾。

六人の功労者たちはみな、極東選手権、明治神宮大会、大選手権、日本選手権などに優れた戦績を残し、所属チームで主将やそれに準ずる役割を果たし、海外遠征を支え、協会設立の資金集めに奔走し、設立後は専務理事、常任理事として、引退後は顧問、常任顧問として、一方OB会では役員として重責を担った人々である。彼らは一九〇〇年代前半から半ばにかけて生まれた。成瀬仁蔵の球籠遊戯が日本女子大学校で始まり、井口が帰国して女子高等師範学校で米国の新しい球技の伝道師となった頃、しかし、大森によるYMCA仕込みのバスケットボールがまだ届かない時代だった。六人はやがて、東京、京都、そして神戸のYMCAでこの競技の種が蒔かれる頃、思春期へと成長してゆく。座談会当時はみな、第一線を退き、協会の顧問あるいは常任顧問の地位にあった。

座談会が提供する、各話者のバスケットボールとの出会いに関する情報は、これまでに見たYMCAから大学への覇権の移行を裏付けるものとして興味深い。六人はまさに時代の生き証人なのである。早稲田大学出身の富田は、一九二二年に早稲田高等学院に入学してからバスケットを始めたと証言する。東京帝国大学出身の小林は、神田YMCA会館の近くに住んでいて、一九一八年頃、その少年部で週二回ほどバスケットボールをやっていたと語る。明治大学出身の妹尾も、神田に住み、関東大震災前にYMCAでバスケットボール試合をよく見たと述べる。東京商科大学出身の植田は、中学で

陸軍戸山学校の将校から教わったと語り、立教大学出身の七海は、一九二四年に大学に入学して初めて知ったと、同じく立教出身の野村は、神田に住み、兄が神田YMCAチームに所属していたので、その試合を見に行ったのがきっかけだったと答えている。六人中の三人がYMCA、二人が中等・高等教育の部活動、一人が陸軍との結びつきを示しているのである。小林は「当時、正式なバスケットボールをやっていたのは、日本ではYMCAだけでした」と語っているが、六人の証言は、小林の証言を裏付ける一方、軍部関係者が近代スポーツの普及に貢献していたことも示唆する⁴⁵。

彼らが高等教育を受けた頃は、一九一八年(大正七年)の大学令により、私立大学が制度上「大学」として認知され、その後一九四七年(昭和二十二年)までに、高等教育が、旧制大学(四九校)、旧制専門学校(三六八校)、旧制高等学校(三九校)、高等師範学校(七校)、師範学校(五五校)へと、いくつもの校種に分岐していった時代だった。現代の大学進学率は優に五〇%を超えるが、当時はこれらすべての高等教育機関を含んでもわずか二・二%であったとされる⁴⁶。そんな時代に高等教育を受けられた六人が、恵まれた一握りの人々であったことは疑うべくもない。しかし六名の出身大学は、東京帝大、東京商科、早稲田、明治、立教(二名)と異なり、また出身中学校も、府立一中、府立四中、明治、立教、京華と様々である。こうした多様性が、座談会が提供する情報に幅を与えていることにも留意したい。また一九〇〇

年代に生まれた六名はみな、五〇周年記念誌が出版された一九八一年に七〇代半ばから後半を迎えていた。この座談会は、彼らが記憶を語り継ぐのに残された、限られた時間を使つての貴重なひとときだったのである。

(三) 「前史」の記憶

『バスケットボールの歩み』は、このゲームの渡来における、井口や成瀬ら米国留学経験者の役割を振り返りながらも、その活動に「いずれも、今日のわが国のバスケットボールの隆盛の源となる根本的な契機にはならなかったようである」との評価をあたえる⁴⁷。本書はまた『協會史』に記述されたバスケットボールの歴史に関する箇所を付録として長々と抜粋しているが、その『協會史』は、「日本へ籠球競技が何時伝来したか」という問いに「明治四一年(一九〇八年)大森兵蔵がスプリングフィールドの体育学校を卒業して帰朝したとき我国に紹介されたのが最初である」と答えている⁴⁸。したがって、先述のとおり、一九三六年出版の『協會史』が一つの説を提起し、これを『バスケットボールの歩み』が継承することで「正史」ともいうべき解釈が成立したのである。この間、興水(一九七六年)や谷釜(一九七八年)の研究から、例えば大川・水谷・西川・福田による研究(一九九一年)に至る潮流のなかで、女性の経歴を重視する修正的な史観が足場を固めていった。大川らは明治三〇年代(一八九七〜一九〇六年)に刊行された遊戯書を丹念に読み

ながら、そこに記述された球と籠を使う球技の起源がネイスミスとベレンソンに遡るものであることを検証している⁽⁴⁹⁾。では、大森以後の潮流を「正史」とする書籍の中で、座談会の出席者たちは、それ以前の時代、いうなれば「前史」の出来事を、どのように記憶し、それに関してどのような言葉を残しているのか。

座談会は、「六大学草創のころ」という一節を設けている。この時代こそ、YMCAバスケットボールが全盛期にあつた大正中期のころにほかならない。そのなかで司会者渡辺は、バスケットボールという当時新しかったスポーツに「なにか社会で受け入れにくいといった要素があつたように思われる」と指摘する。これに続くいくつかの証言は、「大正デモクラシー」というリベラルな新しい思潮とは裏腹に、当時なお米国生まれのハイカラ⁽⁵⁰⁾なスポーツに対する偏見や差別が根強く存在したことを示唆する。そのなかには、YMCA時代に先行した、バスケットボールが遊戯であり、女性にするスポーツであつた時代に関わるものもある。そうしたいくつかの語りに注目したい。

まず植田が口火を切る。「私は商大に入つて、バスケット部に入つたと父親に話すと、女の子のするようなことはやめて、男のやることをしろ、と言われたのを覚えていますよ。当時、一般ではバスケットに対する認識とは、その程度でしたね。」植田は一九〇六年生まれ、商大にバスケットボールができたのは一九二三年である。その当時のことになる。こ

こでは、父親が反対したこと、その理由がバスケットボールは「女の子のするようなこと」だからであること、そしてそれが「一般ではバスケットに対する認識とは、その程度」であるという一言によって、単に父親個人の問題ではなく、社会一般のバスケットボール評へと植田によって敷衍されていること、の三点に注目したい⁽⁵¹⁾。

第三の点は、『協會史』の「日本における播種」と題する節にある次の記述によつて、別の角度から裏付けることができる。大森兵蔵が亡くなった当時とあるので一九一三年から一四年の、大正初期のことである。あるとき「日比谷にデモンストレーションをして一般世人の興味を計る為めゲームを広場で行つた。何分にも適当な指導者がなかつたこと、他方日本の青年等が其の競技を子供の遊戯の如く考へて全然興味を起さなかつた為め、不幸にして大森兵蔵の恃いた種子は培養する人もない冬に不知の土に埋れたまま芽も出し得ずに過ぎた」のであつた⁽⁵²⁾。当時の成人男性は、バスケットボールを子供の遊びとみなしたこと、それゆえ普及しなかつたことを確認できる。前者については後述するが、ここでのバスケットボールの表象のされかたを、植田の父親の認識と併せて考えたい。そうするなら、バスケットボールは、年齢的に、そしてジェンダー的に、成人男性には不向き、不適であるとの評価が当時の社会に定着していた、ということになる。

続いて、別のやりとりの後、司会者渡辺は「女の子のやること云々」に立ち戻り、「それはどうということだったんです

か」と追及する。これに応じたのは、発言をした植田ではなく妹尾だった。妹尾はこう語る。「前は女子ルールというものがあつた。ゾーンを決めてね、ここまできたらシュートしてもいいけど、ここではしちやあいけないというような」と説明し、さらにもう一つの遊戯に言及する。妹尾は「小学校の運動会でかごの中にボール入れをするゲームがありますね。あれがバスケットボールというような間違つたイメージが、ほんの少しだけあつたんです」と結ぶのである⁽⁵³⁾。

「女子ルール」については、再三言及してきた、ベレンソンらによる女性向けのルール改正の系譜を継ぐものであることを、研究者が検証している。大川らは、明治三〇年代（一八九七年～一九〇六年）に日本で行われていたバスケットボールが、現在のものとは異なっていたと論じ、差異の一例として「三区画制コート」を取り上げる。これは、コートを分岐線によって三つに分割し、一チーム九名の選手を各区画に配置する、というものである。大川らはそれが、ベレンソンらが一八九二年以降に着手した翻案を起源とするものであるとする⁽⁵⁴⁾。妹尾が解説するゾーンとは、ベレンソンらによって三分割されたコートの一区画のことであるといえよう。少し後に富田は、この点についてこうフォローする。「なぜ女子ルールという特殊なものが生まれたかという点、最初の女子が男子ルールを使ってゲームをしたが、これが少しハードだったという意見が多かった。当時米国の女子はだいたい女子ルールを使っていた。」富田のこの指摘は正鵠を

射るものである⁽⁵⁵⁾。

一方もう一つの遊戯については、今日小学校を中心に運動会で広く行われる「球入れ」競技であるとみることができ。管見の限りでは、球入れは「源平合戦毬入れ」という名称で、一八九七年の遊戯書にその解説をみることができ⁽⁵⁶⁾。成瀬による球籠遊戯とは異なる系譜を持ち、それ以前から存在していたとみられるが、その起源については、機を改めて論じる必要がある。ここでは高橋が記述した、籠や球を使う競技がすべて「バスケット、ボール」として括られていた混沌とした状況を想起すべきである。当時は、様々なかたちの「バスケット、ボール」のどれが正しく、どれが正しくないかを決めるような基準や価値は存在しなかった。しかし次の世代で、YMCAバスケットボールの正統な継承者を自認する人々によって、球入れはバスケットボールの「間違つたイメージ」として受けとめられることになった。

「六大学草創のころ」についての語らひは、七海による「ラグビーだの野球だのは女子はやらなかつたのに、バスケットだけは女子もやつた。そこで、これは女がやるもんだと思われたということもありますね」との発言で締めくくられる。当時「女性がする」スポーツには、より古い時代からのテニスがあり、バスケットボールに少し遅れて普及し始めるバレーボールや卓球があつた。しかしここでは男性のみがやつたスポーツとして、より古い時代からの野球と、二〇世紀に入ってから普及し始めるラグビーが引き合いに出される。こ

れら「男性がする」スポーツとの対比によって、女性とバスケットボールの結びつきが強調されているわけである⁵⁵⁾。

IV. バスケットボールのジェンダリング

(一) 「する・やる」と「イメージ・認識」

再びパイオニアたちの証言に戻り、整理してみたい。

その意味・内容は二つに大別できる。第一は「女の子のする」、「男のやる」(植田)などの語りが示唆する一連の意味と内容である。これは「する・やる」主体としての人間が、どちらのジェンダーであるか、どちらのジェンダーに属していたかを表象する。そしてその答えが、実際のデータ、つまりバスケットボールをやっていた人数を数えることで得ることができる、いかなれば事実によつて検証可能な問いを含むものである。第二は「子供の遊戯」(『協會史』)、「女がやるもんだ」(七海)などの語りが示唆するもう一つの意味と内容である。これは、だれがすべきか、どちらのジェンダーがすべきか、社会がこのゲームをどう見たか、「女性向き」か「男性向き」か、「女性／男性らしい」ゲームか、など当時の人々が抱いたイメージや認識を表象する。これらの問いに答えるには、記述され、記録として残された言説を読み込み、分析しなければならず、同時になぜ、いかにそのようなイメージや認識が形成されたのか、それはいかに変容したのかを掘り下げて考察することも求められるこ

とになる。

さらには、第一と第二の意味内容の相互作用も検討しなければならぬ。本節では、第一と第二について一次資料に基づき、いくつかの検討を加え、さらなる分析の基盤を構築する作業を試みてみたい。

(二) 「する・やる」の統計データ

まずは「する・やる」主体としての人々、つまりバスケットボール競技人口が、各時代にどのくらい存在したか、そして男女の比率はどのくらいで、どう変化したのか、を検証したい。現在では総務省統計局による社会生活基本調査のような定期的に実施される国家による統計調査があり、一定の期間毎に、スポーツ各種の競技人口を推定することができる⁵⁶⁾。直近のデータは二〇一六年(平成二八年)のものであり、設問の内容から、週に四回以上から、年に一〜四日以上までの異なる頻度で、過去一年間にバスケットボールをやったことがある一〇歳以上の人々の数を、性別、健康状態別、頻度別、年齢別に知ることができる。

最も頻度の低い(年に一〜四日以上)までを含むと、バスケットボールの競技人口は総数四八六万四千人、そのうち男性数三〇六万千人(約六三%)、女性数一八〇万三千人(三七%)である。同じ方法で得た野球八一四万三千人、サッカー六七七万人、バレーボール五一三万六千人などの数値と比較することで、バスケットボールの相対的位置を知る

ことも可能である^{⑤9}。しかし明治から大正にかけての時代には、このような大規模で体系的な調査は存在しなかった。当時の競技人口を推計するのは困難であり、文献上の逸話的な記述や非公式な数値をもとに、おおよその値を割り出すのが精いっぱいである。

バスケットボール草創期の一八九〇年代には、成瀬仁蔵が九四年に梅花女学校に校長として着任し、米国留学で得た体験と知識に基づいて「球籠遊戯」を考案し、女学校の生徒たち実践させたことで知られる。バスケットボールの普及は、こうして成瀬による尽力を中心に始まったといえる。

梅花女学校は一八七八年に一五名の入学者を得て開校し、一九〇八年に生徒増加のために、その校舎を土佐堀から北野へと移したとされる。したがって成瀬校長の時代は開講期の敷地と施設のまま、一握りの女学校生がバスケットボールを学んだといえるだろう。その様子を梅花女学校『創立六〇年史』（一九三七年）に窺うことができる。コートは「土佐堀の狭い校庭（約一〇・四メートル×約二一・六メートル）で、人数を「多数の生徒を同時に休養せしめながら」、「生徒を源平に分ち」ておこなわれたという。その規模は、仮に女学校生徒全員が参加したとしても、数十名程度であったと思われる^{⑥0}。

井口阿くりが女子高等師範学校教授に就任した一九〇〇年代になると、バスケットボールは同校で、そして成瀬や井口に啓発されて、あるいは西洋の近代スポーツに対する自らの関心

に動かされた体育関係者によって、日本女子大学校や女子高等師範学校に加えて学習院女学部など他の女子大学でも普及し始める。他方、日頃の体育の成果は、運動会などの機会に、身内や関係者へと披露された。たとえば日本女子大学校の一九〇七年の運動会の来賓の数は、六七〇〇から六八〇〇人で、現代では想像し難いほど多かった^{⑥1}。また、女子高等師範学校等に学んだ学生たちは、卒業後全国各地で教職に就き、バスケットボールの指導に着手する。その様子は、間蔵やヨミダスのデータが示すように、宇都宮高等女学校や第三府立高等女学校等、高等女学校の記事で描写された。同時に「バスケット、ボール」は、高千穂小学校や麻中小学校等、初等教育の運動会の行事としても採用されるようになった^{⑥2}。その競技者は「三年、四年女子」、「二年男女子」などである。こうしてバスケットボールを経験した人々は、男女児から女子大生までを含めるなら数百を優に超えて数千、数万人規模へと、そして観戦者まで含めるならそれをはるかに超える規模へと拡大していった。

一九一〇年代は、YMCA留学組の帰国によって、これまでの流れに成人男性が加わってゆく。その活動拠点は、東京、京都、神戸等主要都市のYMCAだった。しかし「日本バスケットボールの父」ブラウンの観察によれば、当時YMCAの体育施設は、宮田が指導にあたっていた神戸以外は粗末な状況にあったので、競技人口の急速な増加は望むべくもなかった^{⑥3}。東京YMCAでは一九二二年までに、ス

スポーツ施設の利用を目的とする、教会に所属しない準会員数が七九〇名に達し、潜在的に不和の種となっていたことはすでに見たとおりである。一九一七年の新体育館竣工以後、東京YMCAにおけるバスケットボール経験者は、徐々に増加し、五年かけて七九〇名に達したものと推測される。なお、一九一七年以前の状況については、『協會史』の次のような記述が参考になる。一九一七年の第三回極東選手権当時は「我邦に於いて此の競技を知るものは恐らく百人を出でず、勿論代表チームの予選等を為すに相応しい状態ではなかった」とされ、また「其頃の日本ではこの競技を理解と同情と熱心とで見てくれるやうな人はそれこそ十指にも満たなかつたかも知れない」のだった⁽⁶⁴⁾。

こうして大正時代（一九一二年～）は、バスケットボール競技人口のジェンダーによる著しい不均衡、つまり女性優位の中に幕を開けることになるが、一九二〇年代になると、それを是正する行事が一つ、また一つと始まることになる。一九一七年の第三回極東選手権でのナショナルチーム出場、一九二一年の第一回全日本選手権大会、一九二三年のYMCAによる全国バスケットボールトーナメント大会、一九二四年九月の第一回全国中学校選手権大会と同年一月の大学リーグ戦開幕、そして一九二五年の第一回全国高等学校大会である。これらはいずれも男性のみからなる大会であり、しばらくその状態を維持した。女子選手が参加する大会も少しずつ始まるが、全国規模の大会は、一九三〇年代まで待た

なければならなかつた（一九三一年に大日本籠球協会主催で第一回全国女子選手権大会が始まった）⁽⁶⁵⁾。その結果バスケットボールは、YMCAが活動拠点とし、主要大学が集まる都市部と、尋常小学校や中等教育組織が都市部と同様に配置された各地方とで、異なるジェンダーアイデンティティを獲得したようである。その様子は、一九二五年の「アサヒ運動年鑑」に記述されている。「然るに此の競技が東京、京都、大阪の大都市に於ては男女一般に普及されている様であるが、各地方に入ると男子よりも女子の競技会が多く開催せられる様に見受けられるのである。」⁽⁶⁶⁾

当時と、その後の動向は、国家や新聞社等による統計的な調査のデータが入手可能になるにつれて、さらに具体的な数値に基づいた考察が可能となる。ただし、調査母体と方法論が同じとは限らないので、時系列の変化を読むには注意が必要である。それよりもむしろ、各時代の競技人口におけるジェンダー比率を探るのに好適であるといえよう。そうした調査の早期のもの一つに、一九二六年に発表された文部省による「運動団体に関する調査」がある⁽⁶⁷⁾。これは一九二四年時点での「男女中等学校の校友会運動部の設置数及び設置率」に係る調査であり、「男子については中学校及び師範学校、女子については高等女学校、実科高等女学校及び女子師範学校」が対象であった。バスケットボール（籠球）についてみると、女子は学校総数七三〇校中、設置校は六七校、設置率は九・二％である。男子は学校総数五二三校中、設置校

は二校、設置率は〇・四％である。女子中学校（六七校）は男子中学校（二二校）に比べて圧倒的に設置数が多く、その比率は三三・五倍に達していることがわかる。ちなみに、女子の場合は庭球（二六九校）、卓球（二二二校）、排球（七六校）などの数値から、男子の場合は庭球（三七九校）、野球（三一〇校）、蹴球（一四〇校）などの数値から、運動競技間の相対的位置づけを知ることができる。

一九三〇年代には、一九三三年に発表された同じく文部省による「中等学校に於ける校友会運動部に関する調査」がある⁽⁸⁸⁾。女子も男子も設置校数と設置率を大きく伸ばしている。女子は学校総数九四九校中、設置校は四五一校、設置率は四七・五％である。男子は学校総数五九四校中、設置校は二二三校、設置率は三五・九％である。女子中学校（四五一校）は男子中学校（二二三校）に比べてなお多いが、その比率は約二・一倍にとどまっている。さらに一九四〇年代には、朝日新聞の報道によるデータがある⁽⁸⁹⁾。このデータによると一九四一年時点で、女子は学校総数八二三校中、設置校は六三二校、設置率は七六・八％へと上昇している。男子は学校総数五七七校中、設置校は四一四校、設置率は七一・六％へとやはり上昇している。女子中学校（六三二校）と男子中学校（四一四校）の差はさらに縮まり、その比率は約一・五倍へと低下した。一九二〇年代から一九四〇年代には、バスケットボール競技人口におけるジェンダー格差は縮小の一途をたどったことが想定される。これは、次の時

代に両性による参加比率が均衡化し、さらには逆転することの兆しと見ることができるといえる。

第二次世界大戦での敗戦とそれに続く連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）による占領の経験は、戦後日本の再出発に多面的で深い影響を与えることになる。そして、その影響の一端に、米国出自のスポーツが一般人に広く普及した、ということがある。たとえば野球とアメリカンフットボールは戦後ただちに再開され、規模は異なるが、それぞれの発展の道を歩み始めた⁽⁹⁰⁾。一方バスケットボールでは、競技人口における女性優位の伝統が覆されることになった。その状況は日本籠球協会の記録に窺うことができる。この組織は一九四四年に解散した大日本籠球協会が、一九四五年に新たな組織名で再発足したものである⁽⁹¹⁾。

日本籠球協会のデータは、一九五一年から一九七九年までの協会に登録されたチーム数の推移を、いくつかの異なるカテゴリで示している。まず総数は、一九五一年の九三六から、一九六一年に四八七四、一九七一年に七一九三、そして一九七九年に一七四八三へと急激な上昇を遂げた。一九七九年の登録チーム数は、一九五一年の約一八・七倍に達したのである。カテゴリ別に一九五一年から一九七九年をみると、一般男子は九〇から一一九八へ、実業団男子は四一から四八八へ、大学男子は六二から二八〇へ、高校男子は四四三から三二五四へ、中学男子は二〇から三五四三へと増加した。同じ時期に一般女子は二六から四六〇へ、実業団女子は

三から九五へ、大学女子は一二から二二七へ、高校女子は二三〇から三二六七へ、中学女子は九から三六七四へと同じく増加した。一九七九年の時点で、女子が男子を高校と中学において、僅差で上回っていることは注目に値する。これら二つのカテゴリーを時系列で見ると、高校では男子がその前年、つまり一九七八年まで常に女子を上回っており、中学では、男子が一九七六年に初めて女子に追い抜かれている。つまり高校と中学で女子が男子を登録チーム数で上回るのは、一九七〇年代後半になって初めて見られた現象であったことになる。したがって全体としてみるなら、一九五一年からの約三〇年は競技人口では男子優位の時代であったということが出来る。これは、一九七九年における男女の登録チーム総数からも確認できる。男子は九五九五、女子は七八四六であり、男子は女子の約一・二倍である²⁸。

一九八〇年以降の動向についても統計調査は存在するが、ここでは前出の総務省統計局による社会生活基本調査(二〇一六年)の要点を再訪するにとどめたい。バスケットボールの競技人口総数は四八六万四千人、そのうち男性三〇六万千人(約六三%)、女性一八〇万三千人(三七%)であった。男性と女性の比率はおおよそ三対二である。男性は女性の約一・七倍ということになる。一九七九年の約一・二倍からこの二〇一六年の約一・七倍に至るまでの三六年間、おそらく競技人口では男子優位の時代が続いたものと思われる。しかし、昨今の女子バスケットボールのプレザンス

の高さは、この比率以上の印象を一般国民に与えているといえる。例えば二〇二〇年東京オリンピックの成績をとりあげても、男子一位、女子二位であった。東京で開催された五六年ぶり(正確には五七年ぶり)の大会での、女子バスケットボールの存在感は、男子バスケットボールを凌駕していた。

「戦後」という時代を一括りにするのは無理があるし、実業団とか高校といったカテゴリーごとの偏りも存在した。それでも、敢えてバスケットボールにとつての戦後を語るなら、それは、両性の参加の急増によってカテゴリーごとの差異が相殺され、日本を代表する近代スポーツとして、そして男女共同参画型の競技としての地位を築いた時代だった、というべきだろう。そこに、近代スポーツの一競技が、ジェンダー格差を克服してゆくプロセスと、その成熟する姿を認めることも可能である。

とするならば、戦後との対照で浮かび上がる戦前の、バスケットボール競技人口のジェンダーによる不均衡に、改めて目を見張らざるを得ない。資料は、競技人口の多数派が、最初から一貫して女性優位であったことを示唆する。とりわけ全国的にみるならば、戦前のバスケットボールは女性がする競技だったのである。

たしかに都市部の競技人口には男女が混在した。最も注目を浴びる大会は男性のものだった。大日本籠球協会のような統括団体の要職は、男性が占めていた。しかしここで、「手

鞠」あるいは「まりつき」という伝統的遊戯と、その文化的な表象作用の問題に触れておかなければならない。検証によれば、古く平安時代に男性の高貴な人々の遊戯であった蹴鞠が、江戸時代に「手鞠」となり、女性の遊戯と化したものが、明治時代のまりつきの起源である²³⁾。一八九〇年代に遊戯が流行し、男女の領域分化と近代的異性愛規範の厳格化が進むにつれて、まりつきは全国で幼少期、学童期の女兒の遊びとして定着した²⁴⁾。ドイツからのゴム製まりの輸入の始まり（一八八三年）とゴム製まりの国産化（一九〇五年）など、産業化と科学技術の恩恵をも享受した²⁵⁾。したがって当時の社会でまりつきは、「女兒の遊戯」という文化的な表象として作用していたといえるだろう。バスケットボールはまりつきと見た目がよく似ているので、日本での始まりから「西洋まりつき」という目でみられ、女兒の遊びと見られる宿命にあったとはいえないだろうか。

大正時代にバスケットボールをやった男性たちは、彼らのスポーツが「女がするもの」とみられる、いわばかれらにとつての「負のレガシー」とでもいうべき重荷を背負いこまされていた。なかでも大日本體育協會、YMCA、そして大日本籠球協会の三者は、バスケットボールを振興する組織として、男の組織として、この「負のレガシー」と対峙し、これに対抗せざるを得ない立場にあった。これらの組織に所属した男性たちは、「女性がする」スポーツを「男性もする」、ひいては「男性がする」スポーツへと転換する要請を

引き受けなければならなかったのである。次節では、そうした目的のための營為の手がかりを、当時の資料や文献の記録や記述等を探ってみたい。

（三）「女性向きスポーツ」から「男性向きスポーツ」へ

一九〇八年の大森兵藏の帰国以降バスケットボールの普及を開始したYMCA、一九一二年設立の大日本體育協會、そして一九三〇年設立の大日本籠球協會、これら三者はその目的が知育、徳育、体育の推進であれ、近代スポーツの振興であれ、バスケットボールに関しては、女性スポーツとしてのレガシーに直面し、その上で男性スポーツとしてこれを奨励するという共通の課題に取り組まなければならなかった。むしろん公式の言説では、三者ともに男女競技としての実践を標榜してはいた。しかしその背後に潜む、男性としての女性に対する上からの目線、あるいは軽視ともいうべき態度を読み取ることはそれほど困難ではない。

たとえば、『協會史』にみられる、第九回極東選手権に関する記述はその一例である。

昭和五年、大日本體育協會は、恒例の全日本選手権大会を行はず、第九回極東選手権競技大会に備へる為に全力を傾注して、自ら全日本的ピックアップ・チームを編成して極東大会日本代表に推し、其のチーム参戦の結果は、中華に二勝、比律賓と一勝一敗の結果選手権決定戦に惜敗し雄図潰えたが、大

日本体育協会が斯技に手を染めてからの劃期的な好結果で、此の記念すべき競技記録を斯界への贈物として、バスケットボール競技の直接管理を終結したのは、大日本体育協会として聊か最後の華を咲かしたものと云つても差支あるまい⁽⁷⁶⁾。

ここで言う「雄凶潰えた」の「雄凶」という語は、「雄々しいはかりごと」という意味であり、「男らしい」というニュアンスが伴う表現である。もちろん「スケールの大きな」という意味で、女性の行動や活動にまつたく使われなかったというわけではないかもしれない。が、以下のような、これに続く女子バスケットボールに関する方針の記述と併せて、現代的な視点から読むなら、ジェンダーバイアスの存在は明らかである。

大日本体育協会は女子のバスケットボール競技に対しては直接の関係を有せず、唯、昭和五年の第九回極東大会に当たつて女子エキジビション競技を計画し、其の為めの全国予選を行ひ、又極東大会の女子エキジビション競技を行つて、大会に華やかないどりを添えたが、女子バスケットボールに対する唯一の直接管理であつた⁽⁷⁷⁾。

協会は一九三〇年の時点まで、ほとんど女子バスケットボールに関わつてこなかつたことを認めるが、そのことに對する自省や悔悟は感じられず、むしろエキジビションの開催

という、正規大会の開催に比してずっと軽い扱いで済ませたことに對してさえ、自賛的である。しかもそれが大会に「華やかないどりを添えた」と評価している点で、男女役割への期待も男尊女卑的であるといわざるをえない。

とはいえ、大日本体育協会が一九三〇年代という歴史的文脈の下で、女子バスケットボールの普及に努力したことも事実であり、当時の価値基準や行動規範に照らすなら、時代の制約の中で前向きな姿勢をみせたことを評価すべきかもしれない。現代の視点にそれがジェンダーバイアスや男尊女卑に映るのは当然といえは当然である。

いずれにせよ、大日本体育協会の体質は、『協會史』を付録のなかで長く引用している『バスケットボールの歩み』を出版した大日本籠球協会の役職者たちに共有されていたことは間違いない。同書に掲載された「座談会 協会設立以前のバスケットボール」についてはすでに分析した。続く座談会企画第四弾「協会の解散まで」には「外国語の禁止と女子の大会」と題するセクションがあり、その後半で、女子の競技参加に話が及ぶ⁽⁷⁸⁾。このときの発言にも、同様の傾向を嗅ぎ取ることができる。東京帝大OBで、協会理事、規則、審判、技術委員長等を歴任した畑龍雄は、司会者渡辺の「ところで、協会が設立されて一九三二年（昭和六年）に第一回の女子選手権が開かれています、このあたりのいきさつについてお聞かせください」との問いかけに對して「結局、協会が女子にもやらせなきやと云うことで始まったん

だ。その前に各地方各方面でやってた大会はいろいろあったが・・・。」と答えている⁽⁷⁹⁾。

畑の発言の後半の部分は、すでに見たように一九二〇年代に女子の大会が、全国的な統一を欠いたままで始まった事情を的確に捉えている。ここでは前半の「結局、協会が女子にもやらせなきゃということで始まったんだ」という部分に注目したい。これと同じ前提に立つ証言がさらに続く。畑はさらに「そのころ大学の二、三年生の方がよく女子を教えに行っていた。浅野さん、妹尾さんなんかも女子を見に行つた」と述べ、これを受けて京都大学OBの三ツ本常彦は「私達の大学のころ女学校に教えてに行つたね」、早稲田OBの富田は「そのころ浅野さんがお茶の水を見ていたね」と述べている⁽⁸⁰⁾。ここに共通するのは、男性を主、女性を従とする力関係である。男性は女性のための大会を開催し、女性を指導する立場にある。女性は大会を開催してもらい、指導を受ける立場にある。発言をするときの男性たちは、上からの目線で女性を見ているのである。

時代を遡るが、大阪朝日新聞神戸附録には、当時のメディアの女性観をもっと露骨に伝えるものがある。それは、一九一三年に神戸YMCAで体育場がつけられたとき、そこで行われたバスケットボールを紹介する記事である。長くながるが、その一部を引用する。

同競技「バスケットボール」はアメリカに起これるものに

て雨天の際行ふべき室内運動としては殆ど理想的なものなるべし、我国にては東京の某外国人間に昨秋より初めて行はれたるのみ⁽⁸¹⁾。其法は五人のメンバーありて白赤のセンター間に投ぜられたるボールを争つて取り上げ打ち落とし味方のレフト、ライトの前進兵、及び同じくレフトとライトの護衛が受取り奪取り敵陣に掲げる網籠に投入して一挙二点を収むる筋道なるが、「白と赤との五人入り乱れて敵を防ぎ味方を助け勇戦奮闘する様勇ましとも勇まし⁽⁸²⁾。一回のゲームは前後二十分宛即ち四十分間を限度とし其間の得点数を以て優勝を決す⁽⁸³⁾。女らしく敵を妨害したる組にはファウルを宣言し自ら懲罰の制もあり⁽⁸⁴⁾」。

ここに「女らしく敵を妨害したる組にはファウルを宣言し」とある。現代の眼には奇異に映るこの説明は、「敵を妨害」する行為が「女性らしい」ものであり、それはファウルの対象である、と読むべきであろう。常軌を逸する行為が一方のジェンダーと結びつけられているのである。当然暗黙の前提は、常軌にある行動がもう一方のジェンダー、つまり男性のものであり、それゆえ、「女らしく」云々の直前にあるように「勇戦奮闘する様勇ましとも勇まし」いわけである。すなわちバスケットボールは本来は「男らしい」競技であるとされる。

同じ頃の神戸YMCAの報告書にも、類似した記述がみられる。体育場の完成後、そこでバスケットボール、バレー

ボール、インドア・ベイスボールという三つの米国生まれのスポーツが盛んに行われるようになったが、会員の人気はバスケットボールに集まった。その理由は「他二種に比し勇壮なるため」であると言われているのである⁸²⁾。

これら二つの文献は、反則という常道を失した行動を「女らしい」として厳に戒める一方、競技そのものを「勇ましくとも勇まし」とい「勇壮なる」活動として称揚する。ここにおいてバスケットボールは「女性がするスポーツ」から「男性がするスポーツ」へと確かに転換を遂げている。

バスケットボールを「男らしい」と見る目は、四年後の第三回極東選手権に自チームを日本代表として送り出した京都YMCAによる激励の弁にも、修辞表現となつて姿を現す。京都YMCAの広報は、日本チームへの期待と、そこに立ちはだかる中国とフィリピンの二チームをこう形容する。

これにて我会選手が日本代表選手と相成りしわけに候。敵は名にし負ふ支那、比立賓の荒武者、我にとつては恥ずかしからざる好敵手に候、何様斯の国際的競技に我日本を代表せるわけに候間其任や重し、責任や大なりと感じ候・・・⁸³⁾

残念ながら、佐藤金一率いる日本代表の京都YMCAチームは、期待に応えられず、惨敗を喫した。代表チームは慰労会に臨んだあくる日に「謝文」を残したが、その一節にこうある。

不肖等非才をも顧ず去んぬる極東オリンピック大会にバスケット、ボール日本側代表選手たるの光榮を担ひ、衆望を負ひて東上し晴れの舞台に我が腕を試さんことを期せしも敵は千里遠来の好客!! 各隣邦の鋭を選せる猛者! 如何に意気に於て勝るも技の之に伴はざるを如何にせむ。彼にありては斯競技は多年習熟の技たり、我には渡来後未だ僅かの年月を闊するのみの新遊戯、自ら其間に逕庭あるは免れず、既に戦の数も、計り得べきは自明の事なり、六の戦士ベストを尽して戦ひしも進軍遂に勝たず、防戦また利なし、遂に涙をのんで千里遠来の士に名をなさしむ⁸⁴⁾。

これらの文書にある「荒武者」、「猛者」、「戦」、「戦士」、「進軍」、「士」などの句、そしてそれらを含む節の一つひとつが、当時にあつて、そして今日なお、男性を、そして男らしさを表象することに異論の余地はない。当時のバスケットボール関係者は、この競技を男の戦いとして表現し、そこで男らしさが発揮されることを期待した。バスケットボールは男らしい競技でなければならなかったのである。その気持ちは、先に都市部と地方でバスケットボールが異なるジェンダーアイデンティティを獲得しつつあるかの観察を残した「アサヒ運動年鑑」の次の一言によつて端的に表現される。

バスケット・ボールそのもの、競技は決して斯く女性的ではないので、堂々たる男子の競技として最も価値があるから

今後はもっと地方の男子の間に於て此の競技が普及し発達せん事を望んで止まないものである⁽⁸⁵⁾。

以上は、バスケットボールを「する・やる」側の気概や心意気を伝えるものである。では、こうした心情は、「見る」側にどの程度伝わっていたのか。最後に、この点を示唆する出来事を紹介したい。京都YMCAは、一九二一年（大正一〇年）に京都市から補助金三〇円⁽⁸⁶⁾を受け、岡崎公園御陵西側にバスケットボールのゴールを建設した。京都YMCAがゴール建設完成を祝って、同年一二月四日に同地で近畿バスケットボール大会を主催したときのことである。京都YMCAの記録にこうある。

該バスケットボール競技は、未だ世人の耳目に新なると、競技の性質態度全て、男性的にして、当日岡崎原頭の人を全部此所に吸引せり。観衆の血をたぎらして午後五時に及び漸くプログラムは尽き、二戦二勝同志社青年会に（エビスヤ運動具部寄贈の）花環を、青年会運動部長中村栄助氏の手より渡し、同氏の発声に応じ万歳の三唱をもって大会を終ふ⁽⁸⁷⁾。

さらに「バスケットボール大会雑録」には、公園に集まった人々にこの競技がどう映ったかを示唆する興味深い情報が残されている。「岡崎運動場監視人横田先生」なる人物は、次のように語った。

バスケットボールとはこんなものか、何ちゅ男らしくて面白くて、そして冷や冷やするもんかな。世の中にこんな面白い運動があるとは知らなかった。野球もテニスもフットボールもバスケットボールの前にはすべて顔色は無いがなあ。なんで今少し早くからこんな運動をやって見せなかったんだい。これでこそ運動場を貸すねうちがあるわい⁽⁸⁸⁾。

横田氏の印象がいかにか一般的であったのかは、今後の検討に委ねたい。

おわりに

本論は冒頭で、明治から昭和初期までの時代にバスケットボールに何が起きたのかを、第一に、ジェンダリングの視点から振り返ること、第二に、より多くの競技を対象に近代日本スポーツ史をジェンダリングの視点から読み直すための方法論を提示することを目的に掲げた。最後に、第一目的の達成度を確認し、第二目的に取り組むものとする。

バスケットボールはこの時代に、女性や子供の遊戯から一人前の男性がする競技へと変貌を遂げた。第IV節はその変化を「する・やる」と「イメージ・認識」という二つの角度から分析した。前者に関しては「する・やる」主体としての人々、すなわち競技人口の変化と男女比率の変化を分析するための基礎的作業をおこない、バスケットボールのジェンダ

リングを裏付けた。また第Ⅲ節では「三区画制コート」のような「女子ルール」が設定された経緯にも言及した。競技人口とその変化、男女比率とその変化、そして規則とその変化は、競技の「属性」と見なし得る性質や特徴である。その位置づけは後に整理する。

後者「イメージ・認識」の変化については「いかに見たか・見られたか」という「見た目」と、「いかに語ったか・語られたか」という「語り口」、換言するなら視覚的な位相と、言語的な位相のそれぞれで捉える必要を明らかにした。視覚的位相については、限られた紙幅であったが、バスケットボールと「まりつき」の類似について指摘した。言語的位相については、バスケットボールをする男性たちがいかなる反対や抵抗に直面し、彼らがどう挑んだか、という節末で繰り返し提示した課題に沿って、次のようにまとめることができる。

まず、バスケットボールの日本パイオニアたちは、いかなる反対や抵抗に直面したのか。この点には、植田が証言した「父親の反対」が、一つの示唆を与えてくれる。当時資料はさらに、バスケットボールの反対が家族の中だけでなく、学校で、あるいは社会でさまざまなかたちをとって存在していたことを伝える。第二次世界大戦前の家父長主義社会のなかで、父親、校長、そして権力者は一般に、男性が女性的な行動をとったり、活動に従事したりすることに強く批判的であった。その様子を具体的に裏付けることを、これからの課

題として明記しておく。『協會史』に記述された、初期バスケットに対する社会の無関心は、こうした批判に後押しされたものであったものと推察できる。

次に、パイオニアたちは、これらの反対や抵抗にいかにも挑んだのか。ここで想起すべきは、バスケットボールの男子競技としての普及を推し進めた集団が、主として大学生という、恵まれた環境に育った人々であったことである。パイオニアたちの証言は、YMCAやバスケットボールなど異文化由来のものごとに対する興味関心が、家族、学校、社会の反対を凌駕するものであったことを裏付けている。このとき生じている対立関係は、より広い文脈から、明治・大正期の「ハイカラ」対「バンカラ」の相克に位置づけることもできるかもしれない。この点も、今後の課題として明記しておく。

組織・制度的な観点からは、男たちの挑戦は次のように展開した。パイオニアたちはYMCAから大学へ、さらには大日本籠球協会の設立へ、極東選手権大会出場へ、オリンピック出場へと、主要な制度的基盤を構築し、掌握してゆくことで、「男の競技」としてのバスケットボールの認知を次第に高め、社会による承認を強化していった。そして言説空間では、次のような形で現出した。彼らは女性に対する軽視、偏見、上からの視線を「男性化」戦略の前提として共有していた。反則を「女らしい」とみなし、正々堂々たる勝負を「男らしい」試合とみなした。そして言説空間を「男らしさ」の修辞で満たすことによって男性化を図った。「横田先生」の

感想は、ジェンダリングの効果が見る側に届いていた可能性を垣間見せる。

このように考えるなら、バスケットボールのジェンダリングとは、スポーツ競技そのものの変化である以上に、バスケットボールをまなざす中心的視点が移行することと関係している、ということが出来る。それは、成瀬や井口がいだいたビジョンのなかでのバスケットボールから、大日本籠球協会統轄者たちの戦略のなかでのバスケットボールへの移行であったということになる。スポーツのジェンダリングを、さらに広い視野から考察するには、ジェンダリングをこのような特徴を内包するものとして捉える視点が不可欠である。

バスケットボールは一八九〇年代から一九二〇年代までの約四〇年間に、日本で「女性や児童の遊戯」から「一人前の男性の競技」へと変化を遂げた。しかしこのジェンダリング現象は、バスケットボールに限られたものではない。たとえば卓球、テニス、バ

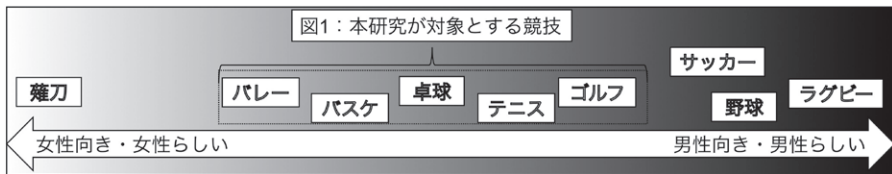


図1

レーボールはいずれも主に「女性がする」スポーツとして始まり、やがて「男性もする」スポーツになり、反対にゴルフは、まず実業家たち「男性がする」スポーツとして始まり、やがてその妻たち「女性もする」スポーツとなったことが知られている⁸⁸⁾。

当時の薙刀のような「女性向き・女性らしい」実践から、サッカー、野球、ラグビーのような「男性向き・男性らしい」実践までのスペクトラムを想定するなら、バレーボール、バスケットボール、卓球、テニス、ゴルフという五つの競技は、その中間に位置づけられる(図1)⁸⁹⁾。これら五つの競技におけるジェンダリングに歴史学の立場から取り組むには、次の条件を満たす検証作業が求められる。

第一に、ジェンダリングを分析するための枠組みとして、イギリスの社会人類学者やスポーツ人類学者によるスポーツ競技の「ジェンダー化 (gendering)」と「脱ジェンダー化 (de-gendering)」に関する理論を援用する⁹⁰⁾。第二に、五競技の属性として、競技人口とその変化、男女比率とその変化、そして規則とその変化について、できるかぎり正確に把握する。第三に、スポーツ競技の実践の「場」の多様性を目を向ける。さしあたり五つの競技の実践の場として、最低でも、中等教育機関の体育授業カリキュラムでの活動、中等教育と高等教育それぞれの部活動、YMCAのような外来組織での活動、そして、これら三つの場での活動を報道するメ

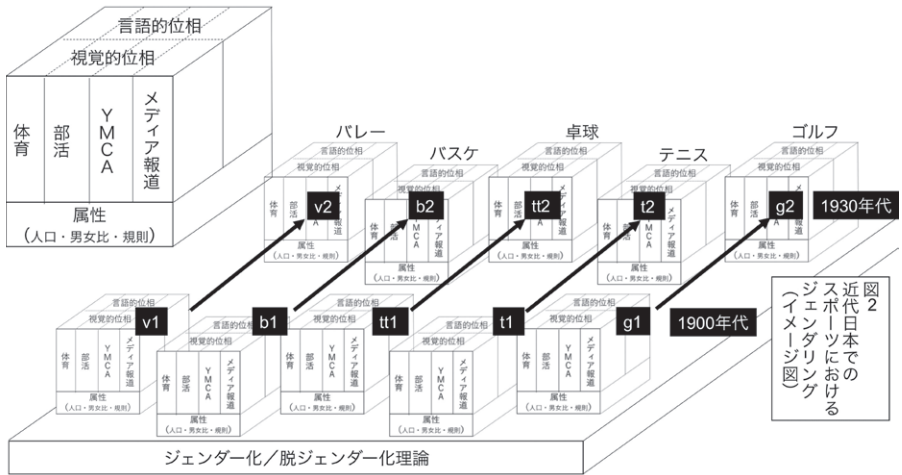


図2 近代日本でのスポーツにおけるジェンダリング(イメージ図)

ディアの記事や社説を含むものとする。第四に、競技の見た目、つまり視覚的位相と、どう語られ、記述されたかという言語的位相との二者を区別する。まとめるなら、第一条件での学びに基づき、第二条件の属性を考慮しながら、第三条件が示すところの多様な場の一つひとつにおいて、第四条件が示すところの二つの位相におけるジェンダリング作用を検証することによって、明治から大正をへて昭和前期にいたる近代日本でのスポーツにおけるジェンダリングの実像を、広い視野から明らかにすることが可能となる(図2)。

これらの作業は、日本スポーツ近代史に、これまで十分に振り返られることのなかった角度から、光を当てることができるのである^②。

(1) ここでは「ジェンダリング (gendering)」を、「ものごとくに性差を付与するようにみえる現象」、または「ものごとくに性差にもとづく秩序を構築するようにみえる現象」と定義しておく。日本語の「ジェンダー化」という言葉とほぼ同義であるが、社会人類学者カレン・スロスビーらが使う「gendering」をカナ表記したかたちを採用する。詳細は次を参照。Throsby, Karen. *Immersion: Marathon Swimming, Embodiment and Identity* (Manchester University Press, 2016). 特

第六章 “Gendering Swimming”。

- (2) 朝日新聞社 『朝日新聞クロスサーチ (聞蔵Ⅱビジュアル)』。読売新聞社 『ヨミダス歴史館』。
- (3) 当時「バスケットボール」の訳語は統一されず、関東では「籠球」、関西では「藍球」が使われていた。しかし中国語で底の抜けたカゴを「籠」、手のついたカゴを「藍」と呼ぶことから、「籠球」の訳語が定着していったとされる。日本バスケットボール協会 『バスケットボールの歩み 日本バスケットボール協会の五〇年史』一九八一年 八一―八二頁。なお「藍球」で検索すると、聞蔵では一九二三年と一九二五年の記事二件がヒットするが、ここで論じられているより後の時代である。ヨミダスでのヒット件数は〇である。
- (4) 男性選手への焦点は、第三回極東選手権が開催された一九一七年に見られた一時的現象ではない。この後に続く五〇番目までの記事のうち女性に関する記事は、聞蔵の場合三件に(すべて一九二二年)、ヨミダスの場合六件(一九二一年二件、一九二二年一件、一九二四年三件)にとどまる。本論末で述べるように、メディアの表象・言説は、より体系的に調査されるべきであるが、大正中期から末期にかけての朝日、読売の二紙の報道において、バスケットボールをする人のジェンダーが女性から男性へと転換したのは、一般的な傾向であった。
- (5) 「運動界」とは当時の新聞で、スポーツ関連の情報を集めたセクションの総称である。今日の新聞のスポーツ面またはスポーツ欄の前身的な役割を果たしていた。表2の最後の記事は、東京YMCAと京都YMCAの試合に関する情報を含んでいた(五九対三二で東京の勝利)。これは、後に見るように、関西から関東への覇権の移行を示す象徴的出来事だった。
- (6) 竹之下休蔵・岸野雄三『近代日本学校体育史』一九八三年 日本図書センター 四三頁。
- (7) 谷口雅子『スポーツする身体とジェンダー』青弓社二〇〇七年。秦芳江「明治期におけるキリスト教主義女子体育について」『同志社女子大学学術研究年報』同志社女子大学教育・研究推進センター一九六四年 二九〇―三〇八頁等。
- (8) 片桐芳雄『評伝成瀬仁蔵 女子高等教育から「社会改良」へ』風間書房二〇二二年。名久井孝義「明治期におけるバスケットボールの受容過程」成瀬仁蔵の「球籠遊戯」から日本女子大学の「日本式バスケットボール」までの教育的意義』『仙台電波工業高等専門学校研究紀要』二六 仙台電波工業高等専門学校一九九六年 一一八―一〇八頁。馬場哲雄「成瀬仁蔵とバスケットボール」『日本女子大学紀要 人間社会学部』四一九九三年 一六七―一七六頁等。
- (10) 興水はる海「女子バスケットボールに関する研究

- (11) 『お茶の水女子大学人文科学紀要』三一
一九七八年 八三一—一〇五頁。野田寿美子・上村絵里衣「近代スポーツ導入期の日本の女子スポーツに関する史的研究(一)―女子バスケットボールの受容過程に注目して―」『埼玉大学紀要 教育学部』五九(二)二〇一〇年 三二—三九頁。谷釜了正監修・小谷究編著・及川佑介／谷釜尋徳著『バスケットボール競技史研究概論』流通経済大学出版社 二〇一八年 一七頁等。
- (12) 正しくは「あくり」だが、原文ママ。『読売新聞』一九〇七年四月二三日「今の女学生の体育／バスケットボール(続く)」三頁。村山茂代『明治期のダンスの史的研究』不昧堂出版二〇〇〇年 一三三—一三八頁。能勢修一『明治期学校体育の研究―学校体操の確立過程―』不昧堂出版 一九九五年 二四八—二五六頁等。
- (13) 古くは次の文献にすでにローンテニスが紹介されている。坪井玄道・田中盛業『戸外遊戯法』一名・戸外運動法』金港堂 一八八五年。
- (14) 平野久子・福田富美子・村田修子・輿水はる海「座談会・日本に於けるスポーツの夜明け…日本の女子陸上界硬式テニス界を中心に」『幼児の教育』八三—一九八四年 二〇—二八頁等。
- (15) 齊藤実『東京キリスト教青年会百年史』財団法人東京キリスト教青年会一九八〇年。京都YMCA史編纂委員会編集『京都YMCA史』京都キリスト教青年会二〇〇五年。『大阪YMCA一〇〇年史』大阪キリスト教青年会 一九八二年等。
- (16) 水谷豊「バスケットボールの歴史に関する一考察(Ⅶ)・日本における発展の功労者Franklin H. Brown略伝」『論集 青山学院大学一般教育部会』二二一九八一年 一九九—二〇九頁。同「バスケットボールの歴史に関する一考察(Ⅷ)・大森兵蔵略伝」『論集 青山学院大学一般教育部会』二三 一九八二年 一七七一—一九〇頁。同「バスケットボールの歴史に関する一考察(Ⅷ)・佐藤金一略伝」『論集 青山学院大学一般教育部会』二四 一九八三年 二六五—二七八頁。同「バスケットボールの歴史に関する一考察(Ⅷ)・宮田守衛略伝」『上越教育大学研究紀要』四一九八五年 三〇九—三三三頁。
- (17) Richard O. Davies, *Sports in American Life: A History* (Malden, Massachusetts: Wiley Blackwell, 3rd edition, 2017), p. 64.
- (18) 一九〇三年(明治三六年)七月二十四日に日本学生YMCA同盟(東京大学YMCAなど加盟五団体)および日本市YMCA同盟(東京市、横浜市、大阪市、神戸市など加盟六団体)が合併し、「日本YMCA同盟」を結成した。

- (18) 斉藤『東京キリスト教青年会百年史』一四八頁。
- (19) 注六参照。
- (20) 日本バスケットボール協会『バスケットボールの歩み』、七〇頁。
- (21) 大日本體育協會『大日本體育協會史』上巻 一九三六年 下巻 一九三七年。『バスケットボールの歩み』。執筆者の一人水谷豊は編纂委員でもあり、バスケットボール研究で数多くの業績を残している。注一五参照。
- (22) 谷釜了正「『球籠遊戲』から『バスケット、ボール』へ」『日本体育大学紀要』七 一九七八年 一一頁。興水はる海「女子バスケットボールの史的考察(一)」『東京体育学研究』三 一九七六年 六一九頁。
- (23) 谷釜了正監修『バスケットボール競技史研究概論』、および内山治樹・小谷究『バスケットボール学入門』流通経済大学出版社 二〇一七年。
- (24) 谷釜了正監修『バスケットボール競技史研究概論』一七頁。
- (25) 竹之下・岸野『近代日本学校体育史』一三頁。竹之下・岸野は「学校体育」の視点から歴史を論じ、本論で説明している四カテゴリーの一つにスポーツを位置付ける。同じ時代の歴史を「スポーツ」の視点から論じる書籍に次がある。木下秀明『スポーツの近代日本史』杏林書院 一九七〇年。
- (26) 文部省制定『学校体操教授要目』開発社 一九二三年 二〇頁等。『学校体操教授要目』山海堂出版部 一九二六年 一三一―二五頁。
- (27) 高橋忠次郎『籠球競技』榊原文盛堂 一九〇四年 九頁。
- (28) 次の書籍は、この時代の遊びからスポーツへの転換を、高度に洗練された社会学、哲学、歴史社会学的な言葉で語り、バスケの流入が遊びにもスポーツにもなり得た文化的環境の存在と、その過渡期の状況を説明する上で有効な枠組みを提供する。榎並重行・三橋俊明『細民窟と博覧会…近代性の系譜学空間・知覚編』JICC出版局 一九八九年。
- (29) 竹之下・岸野 九二頁。
- (30) ただし、第九回大会では女子バスケットボールがエキジビションとして開催された。注七七参照。
- (31) 斉藤実『東京キリスト教青年会百年史』一七〇頁。しかし関東大震災での被災により、第二回以降は開催されることがなかった。
- (32) 同上 一六六頁。
- (33) 同上 一六五頁。
- (34) Robert Peterson, *Cages to Jump Shots: Pro Basketball's Early Years* (Lincoln, NE: University of Nebraska Press, 2002), p. 31.

- (35) 小林は、一九〇三年（明治三六年）生まれ、府立四中、第一高等学校、東京帝国大学卒業、大正一二年極東選手権大会・大正一五年極東選手権大会に出場、昭和二年東大籠球部初代主将、昭和五年日本籠球協会を設立し専務理事を務めた。ここで言及されている一九一七年、一八年当時は、府立四中第二、第三学年で一四〜一五歳だった。『バスケットボールの歩み』五〇頁。
- (36) 次の書籍には、明治時代に旗亭（料理店）で工部大学と立教大学が隣室となり、工部大学の学生が立教大学を「西洋の乞食大学」とけなし、立教大学の学生が工部大学を国に養われている「国賊だ」とやりかえす場面がある。当時の大学イメージを探る上で参考になるやりとりである。国民新聞社運動部編『日本野球史』厚生閣出版 一九二九年 二五頁。
- (37) 早稲田大学RDR倶楽部編『RDR六〇 早稲田大学バスケットボール部六〇年史』一九八三年 一四―二七頁。
- (38) 一九三〇年は第九回極東選手権のため、全日本選手権大会は開催されなかった。『バスケットボールの歩み』三〇二頁。
- (39) 「座談会 協会設立のバスケットボール」『バスケットボールの歩み』七六一―八一頁。
- (40) 『バスケットボールの歩み』六一―四頁。ここに記載され
- た年表では一九二四年（日付不明）第一回女子選手権大会、大日本体育同志会主催 参加二二チーム、①竹早A、とある。なお、大塚美栄子「『大日本同志会』に関する研究」『北海道教育大学紀要 第二部C 家庭・擁護・体育編』四〇（二）一九八九年一〇月二九―四二頁には「一九二二年一月、第一回全日本女子選手（権）競技大会（会場・陸軍戸山学校、後援東京朝日新聞社）を主催したことが報告されている。東京在住の体育同志会員らが運営に当り、陸上競技、バスケットボール、ヴァレーボール等が二九〇余名の参加で競われた」とある。朝日新聞は一九二二年一月一三日の記事で、第二高女（竹早）Bが一二対九で第二高女（竹早）Aを破って優勝したと伝える（聞蔵より）。これら二つは恐らく別の大会（前者はバスケットボール選手権、後者は総合選手権）であると思われるが、いずれにせよ当時における第二高女の優位を伝えるものである。
- (41) 『バスケットボールの歩み』七〇頁。
- (42) 『バスケットボールの歩み』二七八頁。
- (43) 『バスケットボールの歩み』二七六頁、二六二頁。
- (44) 「協会設立以前のバスケットボール」『バスケットボールの歩み』四九―五八頁。
- (45) 注四〇参照。第一回善人女子選手競技大会は陸軍戸山学校で開催されている。

(46) 文部科学省「(補論二) 我が国高等教育のこれまでの歩み」参照

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyoko/chukyoo/toushin/attach/111115599.htm

(二〇二二年八月一三日閲覧)。

(47) 『バスケットボールの歩み』四二頁。

(48) 『バスケットボールの歩み』五七四頁。

(49) 大川信行・水谷秀樹・西川友之・福田明夫「明治三〇年代の遊戯書にみられるバスケットボールについて—アメリカにおける女子バスケットボール(Women's Basket Ball)の影響」『富山大学教養部紀要人文・社会科学篇』一九九一—二四—一一—一五—一三八頁。

(50) 西洋起源のスポーツは一般に当時「ハイカラ」と見なされる傾向があった。とくに大正期に普及する、比較的新しいスポーツであるバスケットボールやバレーボールに対してその傾向は強かったと思われる。次の文献等を参照。日下裕弘『日本スポーツ文化の源流…成立期におけるわが国のスポーツ制度に関する研究…その形態および特性を中心に』不昧堂出版一九九六年。なおハイカラであることは、偏見や差別の対象となる反面、それが魅力となった可能性も高く、大正時代の若者が偏見や差別にもかかわらずバスケットボールに惹かれたのもそれゆえであったと思われる。この

点については、今後機を改めて検討したい。一方、「ハイカラ」に対峙される「バンカラ」に関する研究に次がある。佐藤志乃『バンカラの時代』人文書院二〇一八年。

(51) 植田義己は東京商大卒業後、大正一四年から昭和六年商大レギュラーとして全日本二度、インターカレッジ二度、明治神宮大会一度優勝、昭和三〇年〜四二年協会理事、副理事長を歴任した。昭和三四年からは日本オリンピック委員会(JOC)、国際バスケットボール連盟(FIBA)委員をそれぞれ平成元年まで務め、アジアバスケットボール連盟(現・FIBAアジア)の設立にも関わった。一九六〇年ローマオリンピックでは全日本マネージャーを務めた。二〇〇七年、日本人で初めてFIBA殿堂に表彰されている。

(52) 『協會史』『バスケットボールの歩み』付録として掲載 五七四頁。

(53) 妹尾堅吉は、明治大学卒業。大正一三年に明治大学のバスケットボール部を創設、昭和五年大日本バスケットボール協会創立に参画、以後理事、常務理事、常任顧問、明治大学バスケットボールOB会会長等を歴任した。

(54) 大川他三名『明治三〇年代の遊戯書にみられるバスケットボールについて』一三六頁。

(55) 富田毅郎は早稲田大学卒業。大正一四年明治神宮大会

優勝（早大）、大正一五年日本選手権優勝（早大）、昭和二〜三年早大チーム主将としてアメリカ遠征、昭和三六年〜現在 日本協会常任顧問、父幸次郎は代議士で衆議院議長を務めている。

(56) 山本武 『新案遊戯法』 松村九兵衛 一八九七年

三七―四〇頁。ここには「源平競ヒノ投球」という遊戯の(一)と(二)という二つのバージョンが解説されている。(一)は今日小学校等の運動会で行われている球入れとほぼ同じであり、(二)は(一)をカゴ一つでおこなうものである。

(57) 野球の始まりは、通説では一八七二年に米国人ホーレス・ウィルソンが南校（後の第一高等学校）の生徒に教えたときであるとされる。一方、サッカー、ラグビー、アメリカンフットボールは、二〇世紀の初頭ころからこの順で普及が始まったとされる。当時の東京高等師範の学生たちが、体育にどの競技を導入するかについて検討する状況については、次の文献に詳しい。熊澤拓也「日本へのアメリカンフットボールの流入と東京高等師範学校」『一橋大学スポーツ研究』三二・二〇一三年 四四―五三頁。これら四競技のうち、野球とサッカーは戦前からわずかだが女性参加がみられたが、ラグビーとアメリカンフットボールが女性がするスポーツとして検討されるのは、第二次世界大戦後になってからのことである。注六七、鈴木

論文頁四八参照。

(58) 総務省統計局「平成二八年社会生活基本調査 生活行動―全国（調査票A）スポーツ、第一四―一表 男女、ふだんの健康状態、頻度、年齢、スポーツの種類別行動者数（一〇歳以上）―全国」[<https://www.stat.go.jp/data/shakai/110116/index.html>] より入手（二〇二二年八月一四日閲覧）。

(59) そのほかソフトボール、卓球、テニス、バドミントン、ゴルフを含む合計二一競技と「その他」で合計二二のカテゴリでの競技人口が従属変数である。独立変数はジェンダー、ふだんの健康状態、頻度、年齢の四つである。

(60) 馬場 一六九頁、野田・上村 三二六頁。

(61) 朝日新聞一九〇七年（明治四〇年）二月三日東京

／朝刊四ページ五段 女子大学運動会。

(62) 朝日新聞一九〇六年（明治三九年）五月二九日東京

／朝刊三ページ六段 高千穂小学校春季運動会。

(63) 水谷「バスケットボールの歴史に関する一考察(Ⅶ)」日本における発展の功労者Franklin H. Brown略伝』二〇四頁。

(64) 『協會史』『バスケットボールの歩み』付録として掲載 五七五頁、五七七頁。

(65) 注四二参照。

(66) 『バスケットボールの歩み』七五頁。

- (67) 鈴木楓太「戦時期のスポートとジェンダー…文部省の「重点主義」政策の検討を中心に」『一橋大学スポーツ研究』三一 二〇二二年 四七―五四頁。鈴木は四八頁でこの文部省での「調査」（文部大臣官房衛生課「運動団体に関する調査」『文部時報』第二〇八号一九二六年五月）と、以下につづく二つのデータを用いて、両大戦間期における男女中等学校の校友会運動部の設置数及び設置率の変化を分析している。
- (68) 文部大臣官房体育課「中等学校に於ける校友会運動部に関する調査」一九三三年。
- (69) 「全国男女中等校体育調べ④」『朝日新聞』一九四一年二月二三日 六頁一段。
- (70) 例えばプロ野球は終戦からわずか三か月後の一九四五年一月二三日に神宮球場で東西対抗戦がおこなわれ、一三対九で東軍が勝利している。公益財団法人野球殿堂博物館HP [https://baseball-museum.or.jp/collection/collection_list/poster/] 参照（二〇二二年八月一四日閲覧）。アメリカンフットボールについては、次の文献を参照。日本アメリカンフットボール協会『限りなき前進…日本アメリカンフットボール五十年史』タッチダウン株式会社一九八四年。
- (71) 『バスケットボールの歩み』二二四頁。
- (72) 「加盟チームの移り変わり」『バスケットボールの歩み』五四〇頁。一九七九年のみ小学校数が記録されている、男子八三三校、女子二二三校。この数は本論の数値に含まれている。
- (73) 森下みさ子「女児文化としての「手鞠」の成立過程」『かたち・あそび…日本人形玩具学会誌』日本人形玩具学会誌編集委員会編（七）一九九五年一三六―一四八頁。
- (74) 藤本浩之輔『聞き書き明治の子ども遊びと暮らし』本邦書籍一九八六年。本書に掲載されているインタビュー調査では、都市部で明治二年（一八八九年）から明治三二年（一八九九年）に生まれた女性九人中八人が、農山漁村部で明治一八年（一八八五年）から明治二八年（一八九五年）に生まれた女性六人中四人が、幼少期に手まりをやったと答えている。
- (75) 森下みさ子「女児文化としての「手鞠」の成立過程」一四七頁。
- (76) 『協會史』『バスケットボールの歩み』に付録として掲載 五七六頁。
- (77) 同上。
- (78) 「座談会 協会の解散まで」『バスケットボールの歩み』一一八頁。
- (79) 同上。
- (80) 同一一九頁。
- (81) 大阪毎日新聞神戸附録（一九一三年六月八日付）、水谷『宮田』で注（七二）として引用。三二六頁。

- (82) 神戸市基督教青年会 「大正二年事業及決算報告書」一〇頁、水谷「宮田」で注(三二六)として引用。
- (83) 京都キリスト教青年会 「京都青年」三三一 一九一七六頁、水谷「佐藤」で注(三三)として引用。二七〇頁。
- (84) 京都キリスト教青年会 「京都青年」三三三 一九一七一頁、水谷「佐藤」で注(二四)として引用。二七一―二七二頁。
- (85) 『バスケットボールの歩み』七五頁。
- (86) 当時の若夫婦の初任給が三〇円、現在の初任給が二一〜二二万円であることから、現在の価値で二〇万円程度に相当すると考えられる。https://www.tai-sho-jidai.com/other/post-173 等より推定(二〇二二年八月一四日閲覧)
- (87) 京都YMCA史編さん委員会 『京都YMCA史』京都キリスト教青年会 二〇〇五年 一五三頁。
- (88) 同上 一五四頁。
- (89) バスケットボール以外の四つの競技に関して、出発点となる文献は以下の通りである。ハイナー・ギルマイスター著稲垣正浩他訳 『テニスの文化史』大修館書店 一九九三年。後藤光将 「テニスにみられる男らしさを体現する身体」瀬戸邦弘・杉山千鶴編 『近代日本の身体表象』森話社 二〇一三年。荻村伊智朗・藤井基男 『卓球物語 エピソードでつづる卓球の百年』大修館書店 一九九六年。西村貫一 『日本のゴルフ史』雄松堂 一九三〇年。水谷豊 『バレーボールその起源と発展』平凡社 二〇〇〇年。なお間蔵とヨミダスでテニス、卓球、ゴルフ、バレーボールの記事検索をすると、初出は前者の場合順に一九〇二年、一九〇五年、一九一五年、一九一七年、後者の場合順に一九〇九年、一九〇三年、一九〇七年、一九一五年である。両紙での報道開始時期は、各競技の普及の順番を反映しているといえる。
- (90) このスペクトラムの左から右への順番は恣意的ではない。各競技の当時の競技人口の女性対男性の比率をもとめ、女性の割合が高い順に左から右に並べてある。詳しくは次を参照。鈴木楓太 「戦時期のスポーツとジェンダー…文部省の「重点主義」政策の検討を中心に」『二橋大学スポーツ研究』三一 二〇一二年 四七一―四四頁。
- (91) Throsby, *Immersion*.
- (92) 本論は二〇二二年一月二〇日に国際日本文化研究センターで開催された日文研共同研究会第二回研究会での研究発表「明治、大正、昭和前期の日本におけるスポーツ、文化、ジェンダリング (gendering)」を発売させたものである。また同研究発表はウェブサイトに公開されている。同研究会代表牛村圭教授および対面、オンラインで参加された研究員の先生方か

[https://www.youtube.com/watch?v=1oNOiq4Lxc0]

ら、刺激的かつ建設的な助言を賜った。ここに記して感謝申し上げる。また本論の一部は、拙著『The 'Masculinisation' of Basketball in Japan during the Meiji, Taisho, and Early Showa Eras (the 1890s-1930s)』と『*Asian Journal of Sport History & Culture*』誌で発表する予定である。本論は同論文で論じた「男性化 (masculinization)」から「ジェンダリング (gendering)」へとフレームワークを転換し、新しい資料と分析を加えて、より広い視野から日本スポーツ近代史を読み直すための切り口を提案するものである。

